再版

明治二十五年九月十九日發兌

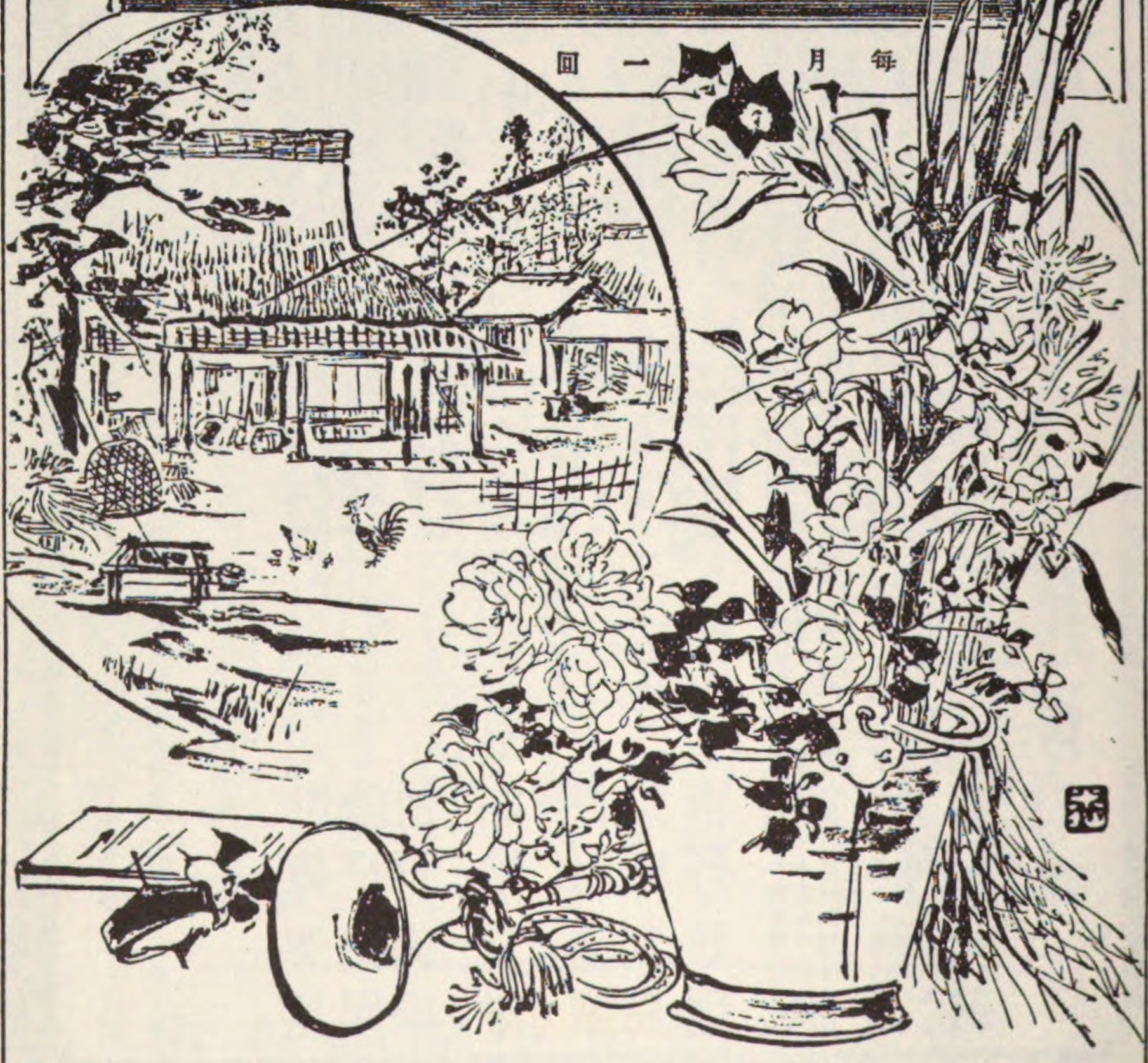
THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

毎月一回



第壹號

新作小説 **作者指名投票廣告**

九月十日賣出
投票〆切三十日以内



右は匿名の新著にして文章着相の癖を判じ看官をして作者の誰たるを默會せしめんとの趣向なれば投票を以各其見る處を指名あるべし的中せる諸君には美景を呈す（投票心得詳細は本書の卷末に記載有之候）

定價金廿五錢郵税六錢



第一卷目錄

㊀齋藤實盛
㊁那須與一
㊂堀川夜討
㊃由良光氏
㊄天徳寺了伯
㊅伊達政宗
㊆頓智
㊇松平信綱
㊈赤穗の尼
㊉熊澤蕃山

毎月一冊出版大判美本
實價金五錢郵税二錢

此雑誌は兒童に史中の事跡を知らしめ娯樂の中に我前賢濶達爽快の風流遺韵を咀嚼せしめ高尚健全の氣風を涵養せんとの目的にて發行せし者也少年諸君陸續御購讀御評判の程希望仕候也

發行所 東京日本橋區通四丁目角 **春陽堂**

大取次所 東海堂○嚴々堂○北國組○武藏屋○増山支店○東京堂○日盛堂○朝日堂○有斐閣○共同新聞舗

文部省撿定濟高等小學校教科用　藤尾錄郎君著　田口卯吉君序

普通應用 家計簿記法

此書は只朝夕數字をたゞに記入せば一家の出納細大漏さず之を明にするを得せしむるものにして公私の學校生徒は固より官吏、會社員、農工商に論なく凡そ一家を經營する者は必ず購讀すべきの要書なり

定價金貳拾錢
郵送料金四錢

文部省撿定濟高等小學校教科用　藤尾錄郎君著

同 例題

右は前書家計簿記法に據り記入法を習學せんとする者の爲に例題を設て其標準を示したるものなり

定價金拾錢
郵送料金貳錢

日記帳　價金七錢　郵税貳錢
元賣帳　價金七錢　郵税貳錢
賄仕拂帳　價金拾貳錢　郵税四錢

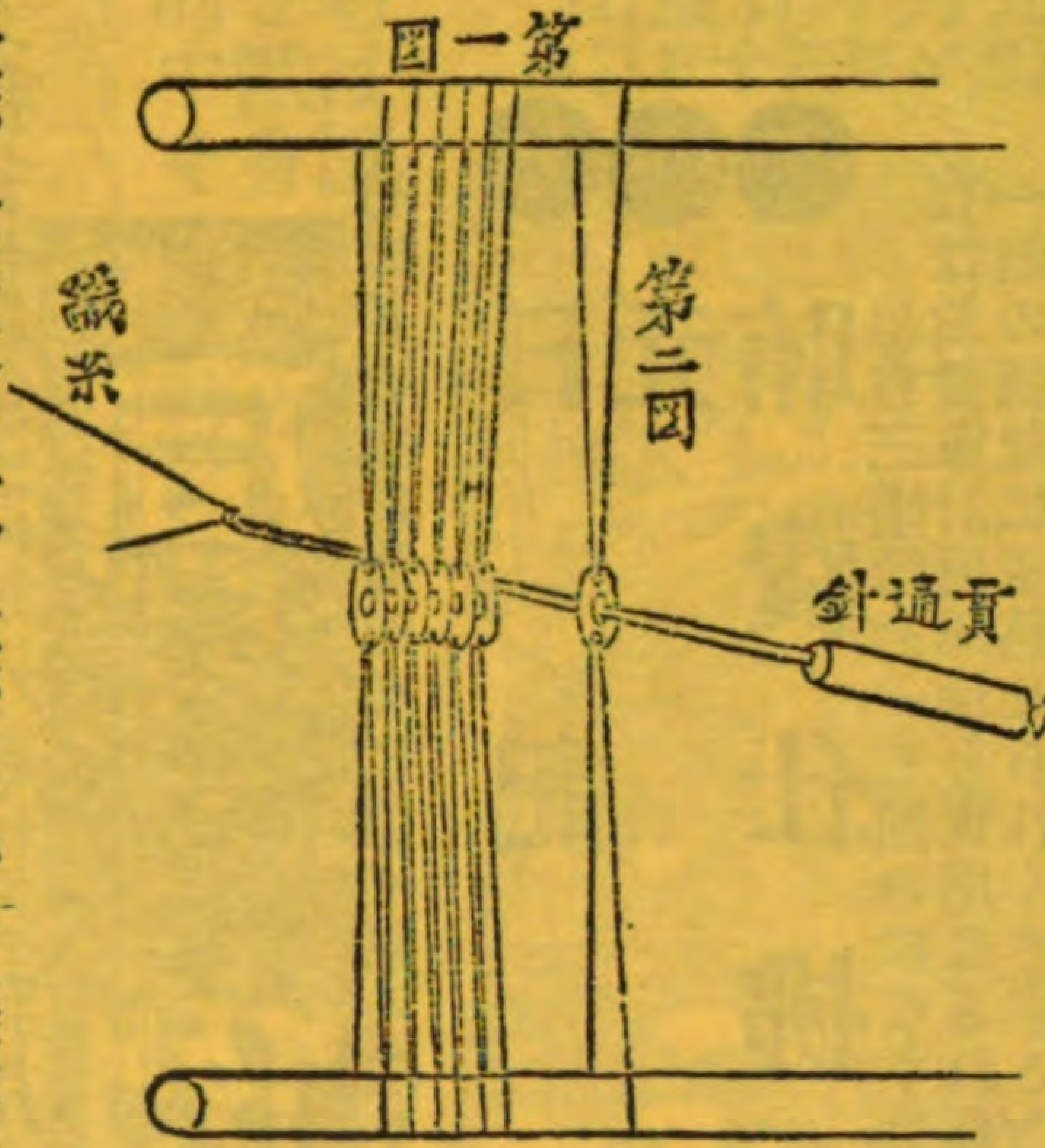
但右三帳簿を一と纒めになす時は郵税金六錢

右は前書家計簿記法を實用なされ候方は勿論又同法例題により簿記法を習學なされ候女學生諸君其他一般の簿記に習熟せられんとする方々の御便利の爲めに調製せしものにして此三帳簿あれば一家の經濟を容易に整理し得べく若くは容易に家計簿記法を習熟することを得べき極めて重寶なる帳簿なり

發兌　東京京橋區彌左衛門町　經濟雜誌社

賣捌　東京、丸善○小林○中西屋　大坂、岡島○丸善○梅原○松村　京都、大黒屋　横濱、丸善　其他書肆

特許改良綜功益の大略
全國機業家諸君に謹告



用方

右第一圖に示せる綜絲の中間楕圓形の小間孔へ第二圖の如く貫通針を貫き而して針頭の鍵に經絲を掛け之を引込むときは經絲自由に貫通す

● 改良綜は綜絲を永く耐持すると在來の綜より數倍を保の利益あり

● 改良綜は在來の綜にて一反を織上るに十二時間を費すものは八時間を以て織上げ其差四時間の利益あり

● 改良綜は踏足輕く且綜送りの手數を除くの利益あり

● 改良綜は經絲引通の手數を省と在來の綜より數倍の利益有り

● 改良綜は經絲を摩擦するの憂なきを以て絲の色合を脫却せざるの利益あり

● 改良綜は織物の光澤を損ず地合を平坦ならしむるの利益有り

● 改良綜は經絲にいかなる節又は續目等あるも自由に貫通するの利益あり

改綜組製造の改良綜は夙に機業家に一大利益を與へ實に將來該業社會に向て經濟の一大變動を來すものなるとは既に實驗家諸君の確信せらるゝ所なり就ては弊店今回一層業務を擴張し普く全國機業家の便利實益を計らんと欲し各地に取次代理店を設け廣く販賣致候間技術と經濟を重ぜらるゝ機業家は何卒御試用之上前陳功益の虛ならざるを知り賜はらんとを希望仕候

全國一手販賣

東京市日本橋區
通塩町十三番地

小間物御商

大和屋小兵衛

附言 詳細の定價表入用の御方は郵券二錢御送附あれば直に御郵送申上候尚取次望の御方は至急御申込を乞滿員の節は謝絕致し候也

（カメオー）

（ピンヘット）



今回ヨリ美麗ナル寫眞入右ハ米國聯合最大煙草會社製造品ニシテ當時非常ノ流行ニ向ケリ最モ廉ニシテ風味最モ美ナリ同業者諸君并喫烟者諸君競テ御注文賜ランヿヲ希望ス

右特約一手大販賣

東京新橋竹川町

肥前屋船來煙草直輸入卸問屋

書畫紹介

爲松雲堂主人 □□□□題

古名人書畫ハ贋作頗ル多ク今大家書畫モ亦贋作アルヲ免レズ是レ奸猾ノ徒大家ノ名ヲ僞リ私利ヲ謀ルガ爲メナリ弊堂之ヲ憂ヒ古書畫ハ正確ナルヲ撰ビ需メニ應ジ現時在京大家ニハ親接ノ榮ヲ荷フテ以テ染筆ヲ請フハ幸ヒニ易シ今回弊堂業務ヲ擴張シ諸君ノ爲メニ全國大家ニ紹介スルノ法ヲ設ケ以テ需メニ應ジ奸猾手段ヲ防ギ美術ノ眞本ヲ愛賞スルノ便宜ヲ開カントス乃大家ノ揮毫ヲ望ム諸君ハ紙絹ノ大小ニ拘ラズ其命アレバ至廉ヲ旨トシ誠實ニ周旋スベシ尙其詳悉ノ順序ハ二錢郵劵ヲ添ヘ御照會アラバ回答ニ及ブベシ

◎幅物◎額面◎屛風◎襖◎書畫帖◎扇面◎色紙◎短冊◎手本◎詩作◎撰文◎起草◎題字◎序文◎跋文◎幟リ◎板下◎看板◎其他總テ詩文書畫ニ係ル類紹介ス

東京日本橋區青物町

松雲堂

書畫展覽會

生花 盆栽

每日開會

會場 淺草公園第五區 美術館

館主 松雲堂

正五位日下部鳴鶴先生書

眞書千字文

全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

從四位巖谷一六先生書

眞行草千字文

全一冊 正價四十錢 郵稅四錢

從四位巖谷一六先生書

眞書前後赤壁賦

前廿五錢 後廿錢 郵稅各二錢

從四位巖谷一六先生書

眞行草正氣歌

◎眞一冊 ◎行一冊 ◎草一冊 各廿三錢宛 郵稅各四錢

岡三慶先生解釋

正續文章軌範正解

正編四十錢 續編四十錢 郵稅各六錢

賣捌 日本橋區室町三丁目六番地杉本翰香堂◎京橋區築地一丁目六番地山中孝之助◎京橋區弓町松邑孫吉◎本鄉二丁目十四番地啡文堂

定價表

	前金	地方郵稅共
一冊	五錢	五錢五厘
六冊	三拾錢	三拾二錢
一拾二冊	五拾錢	五拾六錢

廣告料 二拾四字行數回數に割引無 次號より改正の上壹行に付 八錢

本社は前金にあらざれば發送せず爲替は芝口支局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割増しの事

發行兼印刷人　垣田純朗　編輯人　塚越芳太郎

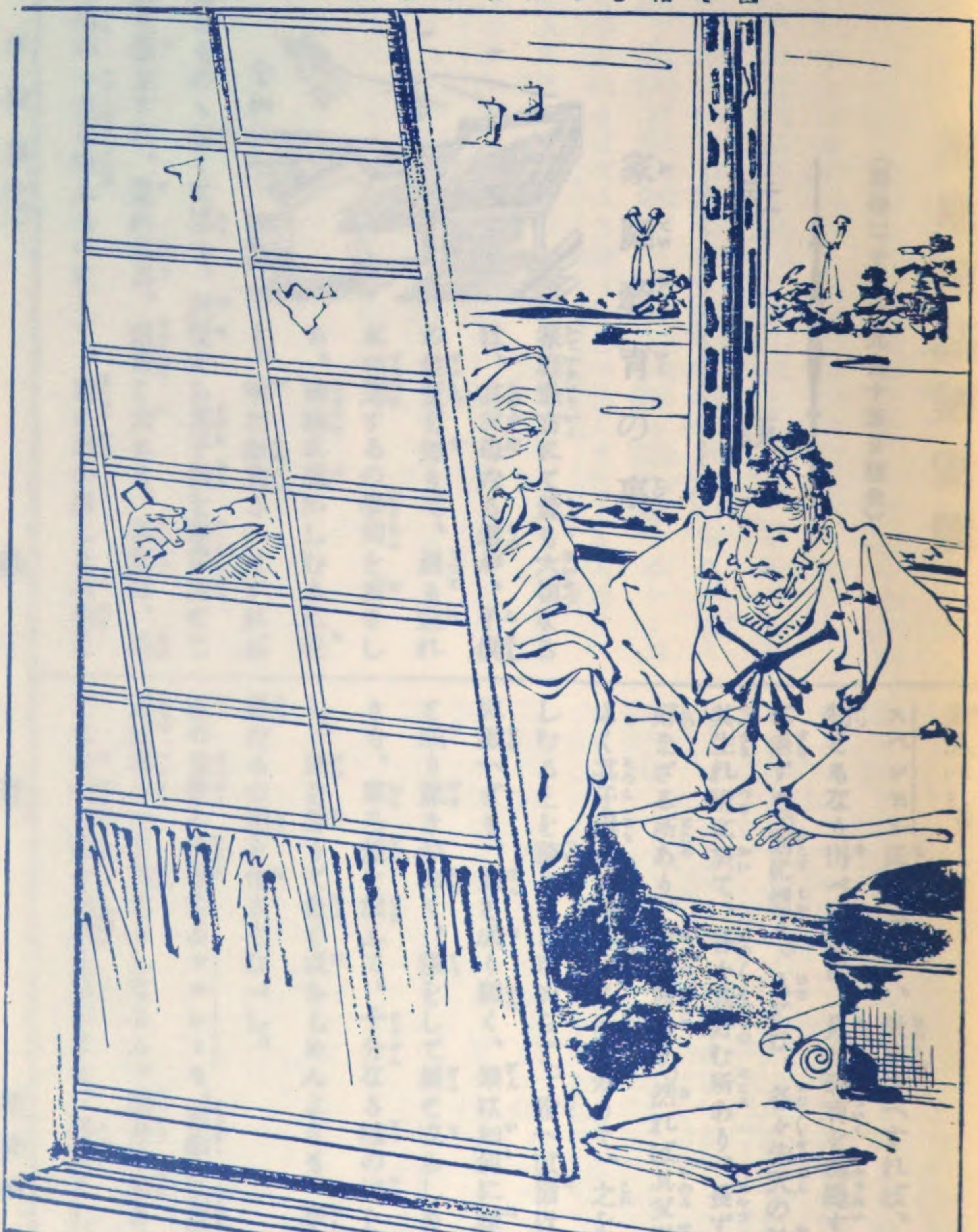
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十五年九月十五日發兌

家庭雜誌第壹號

目録

國を治むるは家を治むる如し



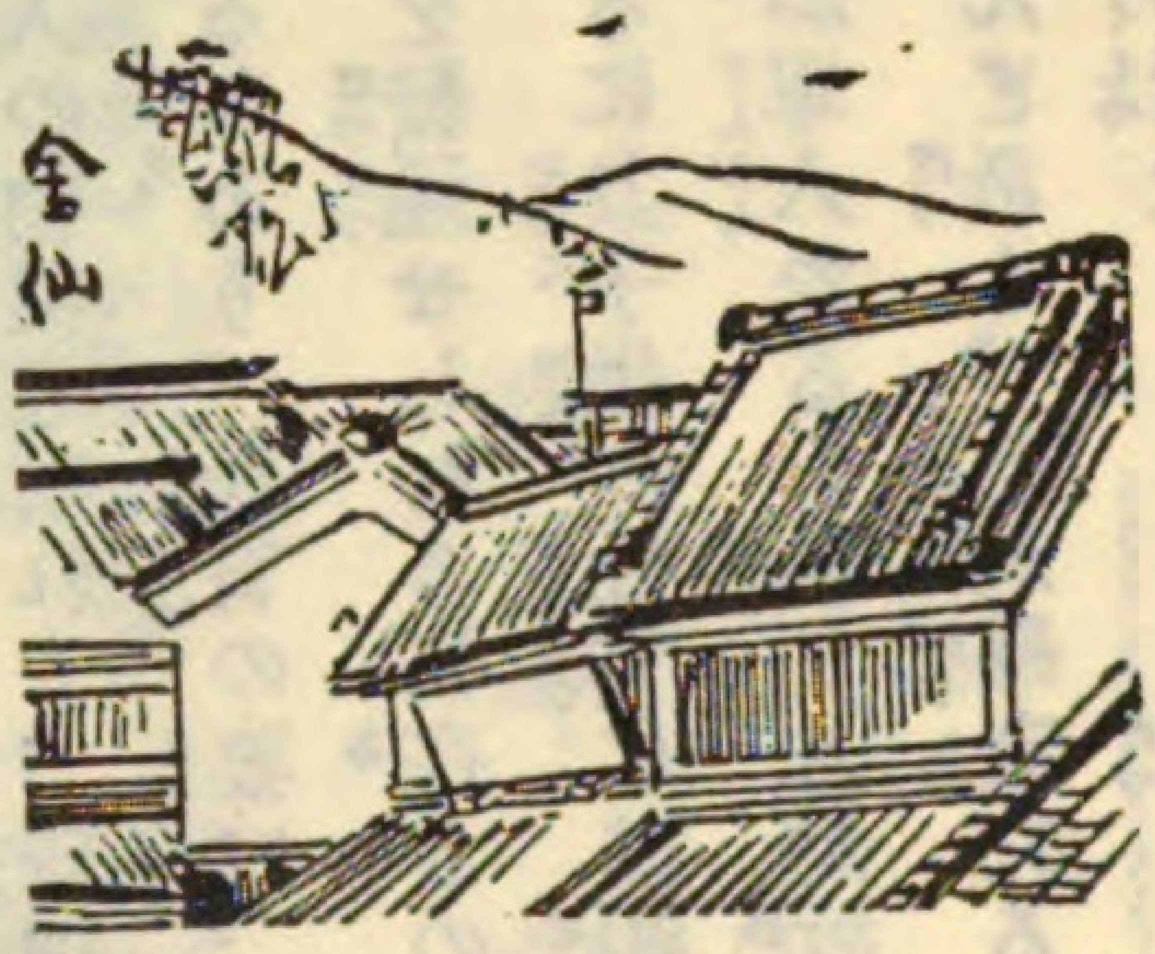
（松下禪尼障子を繕ふ）

家庭雜誌第壹號

（明治二十五年九月十五日發兌）

社説

家庭教育の事



家庭教育にて最も大切なるは、其父母たる者が、子供の性質を知りて、最も之れに相應するの學問を爲さしめ、業務に就かしむるに在り。唯だ教育さへもすれば善きものゝ如くに思ひ、只管すら其子供を學問攻にて攻め潰ぶすは、是れ其名、教育と云ふも、其實は、其子供の一生を賊ふものにして、寔に歎かはしき次第と云ふべし。スペンセル氏も云へり、教育さへすれば、如何なる人物ともなり得べしとは、只だ教育を奬勵する爲の言葉に過ずと。固に然り。人には、各々先天の約束ありて、其生れ附に於て、各々其好む所あり、長ずる所あり、好まざる所あり、短き所あり。然れば其父母たる者は、よく其子供の好み長ずる所を知りて、之を愈よ發達せしむるとを務めざる可からず。喩へば猶ほ、鐵は如何に鍛へども、銀と成り難く、銀は如何に錬れども、金と成り難きが如く、鐵をして銀と成らしめんとするよりも、寧ろ鐵を鍛ふて、十分なる鐵の用を作さしむべし。銀を錬りて金と成らしめんよりも、寧ろ銀をして銀たるの用を作さしむべし。彼の文學の大家たるマコレーも、數學の先生としては、或は平々たる者たりしならん。雪舟の如き、僧侶としては左程名高き人物に非ざるも、畫家としては、我邦

第一流の達人なり。アダム、スミスの如きは、經濟學者としては、古今に比類なき人なれども、彼が嘗て稅務官と爲りしや、其爲すところ、寔に迂濶にして、殆ど人の物笑となれり、所謂尺も短なる所あり、寸も長ずる所あり、敎育の要は、只だ其性の長ずる所に從ひ之を發達せしむるに在るのみ。

然るに其子供の性質には頓着なく、父母の意の儘に、己が軍人たるを欲するが故に、强て子供を軍人たらしめんと欲し、己が學者たるを欲するが故に、强て子供を學者たらしめんと欲し、己が役人を欲するが故に、强て役人たらしめんと欲し、何事も己が欲するマヽに之を敎育せんと欲するは寔に不慈悲の極と云ふべし。

幸に己の欲する所と子供の欲する所と同けれは可し。左もなき時には、子供は如何に成る可きか。

凡そ其子供の成長して、學所る成なく、業遂ぐる所なく、失敗より失敗に續ぎ、終に無賴の徒となり、家を毀り、身を傷ぶり、人の厄介となり、身の置き所なきに苦むが如きは、獨り其子供の罪のみならず、之が父母たる者の罪、亦た大なりと云ふべし。而して其の罪は、半ば敎育を與へざるに在り。其半は、敎育を與ふるも、多くは其性の相應する所に從ふて與へざるに在る也。

殊に其父母の最も注意すべきは强て我子供をエラキ人物に爲さんとするが如きとを、誡むると是なり。何人も其子供の立身出世を願はざる者あらざるべし、然れども立身出世を願ふの餘、其子供の器にもなき大なる望を囑し、之を責立て、之を驅立て、或は多くの資本を費し、或は多くの心配を爲し、是非ともエラキ人物に仕立んとする結果は、如何にも瘦馬に重荷を負はせたるが如く、中途にして斃れ、其心配も、其入費も、其子供の勉强も、空しく水の泡と消え失せると無きにあらず。是時に於て千萬後悔するも、已に晩し。

以上言ふところを約むれば、父母の欲する所に從て教育せずして、其子供の性の應ずる所に從て、教育を施すべしと云ふと、是なり。斯くする時に於ては、其器の大小に從ひ、皆夫れ〳〵の發達をなし、夫れ〳〵の成功をなし、以て各々天性相應の人物と爲るを得べし。是即ち家庭教育の最も大切なる要務也。

論說

現今の家庭

九溟生

一家は一小國家なり、帝王あり、人民あり、法律あり、風俗あり、言論あり、政事あり、教育あり、外交あり、凡そ國家に具はるものは、一家にも殆んど具はり居る也。家庭の進步は一國の進步なり、然れども家庭の進步は、常に一國最後の進步なり。故に一國の進步と家庭の進步とは相伴はざるの觀なきにあらず。例せは一國に於ては自由民權既に發暢すと雖、家庭の一小國は依然たる專制君主國たる也。請ふ一の紳士を借り來りて、我邦の家庭を觀察せん。世の所謂紳士なるものあり、政談演說に於ては能く自由主義を取ると雖、家庭に於ては、壓制君主となり、妻女を遇する玩具の如く、僕婢を役する奴隸の如し。彼れ交際社會に於ては、男女同權說を唱へ、能く妻君の腰を擁して上座に置き、妻君の手を捉へて、車に上ぼすも、一たび家庭に至れは、食膳の不味に立腹し、妻君を打擲することあり。彼れ教育會に於ては、滔々自由教育說を述べ、ペスタロッヂーの開發的教育を談すと雖も、家庭其兒を育するを見れば、リードルの記臆惡きを怒り、叱責罵詈、強壓して、注入的否壓制的の教訓を施こし、一言父母の命に返白する所あれば、撻つとあり、縛するとあり、門外に追ひ出すとあり。彼れ人と法律を談しては、現行法の不完全を說き、憲法違犯を論ずと雖、其家法は、依然たる先祖傳來の野蠻的家法なり、時としては、そ

の家法にさへ違犯して暴戻の擧動を爲すとあり。彼れ能く敎會に於て、數時間の長き祈を爲し、涙を流して道德上の感話を爲すと雖、家庭に於ては、夫婦相口論し、父母に不孝を働き、聖書を擲つて小說を讀み、トランプに熱中して、祈禱を忘るゝとあり、彼れ又た能く大言放論、世の腐敗を歎し、廢娼妓を主張すと雖、其家庭には竊かに小新聞を入れて、最も好んで卑猥なる記事を讀み、卑猥なる談話を爲して憚からざるとあり。要するに今の家庭は此の紳士の家庭也、今の上中社會の家庭は此の紳士の家庭也。其表面斯の如く淸くして、內實は斯の如く不潔なり、其皮肉は斯の如く美にして、其五臟六腑は斯の如く腐れ居るなり。故に我邦の根本的改革は須らく先づ家庭より初め來らざる可らず。家庭の品格は、正眞の品格也、家庭の道德は正眞の道德也。世間には僞多し、作り飾り多し、然れども家庭には僞なし、作り飾りなし。若し質朴なるものを見んと欲す、家庭に就て初めて見る可し、若し天眞を見んと欲す、家庭に就て初めて見る可し。故に家庭の墮落は、一國眞の墮落なり、家庭の高尙優美に進むは、一國眞に高尙優美に進む也。家庭は一國の中に在り、一國は家庭の中に在り。家庭の改革豈に一日も忽にするを得ん哉。

未來の國は亦家庭の懷胎する所なり。未來の國とは何ぞや、一國の繼續者たる兒童是れ也。人生五拾年の運命は多く家庭襁褓の間に作らるゝのみならず、一國百年の運命も亦、家庭の中に作らるゝ也。人一たび生るゝや、必ず三段落を踰へざる可らず、曰く家庭、曰く社會、曰く死。人間靈躰を具へて第一に來るものは實に家庭なり。家庭に於ける因は死後に於ける果を產み、社會に於ける因は、死後に於ける果を產む。家庭は實に一の豫言者なり、苟も之を家庭に聽く、一身の成敗、一國の興亡、百年の後と雖、知る可き也。

一家の歷史

六六居士

現今の家庭に於ては、極めて輕き事として見られなが

ら、其實、極めて輕からぬ事あり、余は世の妻君が、勤めて此事に當らんことを望む、即ち家庭には、必らず日記を注するの風を養ふこと是也。

唯だ日記と云はゞ、極めて些細なるが如し、其記する所午前九時に豆腐を購ふたりとか、午後五時に友人某氏の來訪に遇へりとか云ふ事に止まらしめば、眞とに何の價もなきもの〻如くなれども、更らに其範圍を廣めて、今日は何等の思想を得たる乎、如何なる事を思ひ起せし乎、新聞紙が報ずる所の社會の出來事には、如何なる怪事ありし乎、我は此出來事に向つて如何なる感じを起したる乎、友人、主人、小兒と談じたる中には如何なる緊要なる事ありし乎、來訪の人は、如何なる人物なりし乎、凡そ此等の事を一々注するに於ては、日記は嚴然たる一冊の歷史にして、其後日に至りて之を回顧して云ふべからざる面白味を有するのみならず、また實に後世子孫に對しても必要の事たる也。」且つ正に我家に某々の事ありし時は、即ち社會に某々の出來事ありしと云ふを比較するを得れば、後日に至りて便宜少からざるのみならず、此を注する妻君をして其の知見を開き、注意深き習慣を習ひ、紛糾せし事柄の要點を抓むの技術を覺へ、萬事に用意ある人とならしむるの益ある也。

昔し清敎徒は大革命を起して、共和國を立て、英國の歷史に附するに自由の光を以てしたるに係らず、其黨與悉く文學を卑しむの人のみなりしかば、文學者は皆な之に負き後世に至りて其歷史を記すに至つて、文學者のため大に無實に毀誹を受けたりき。唯だ其間少しく清敎徒のために寃を清ぎたるものは、將軍ルッチンソン氏の妻君が、精細に日記を注しをきたるにより、後の史家之によりて言論して、以て清敎徒の潔白を表したるによる、凡そ、國は家より成り、一國の歷史は即ち一家の歷史なるを知らば、吾家の日記は何ぞ他日一國の歷史の材料たるのときなきを保せんや、且つ父母が其子孫、親戚のために深思、祈禱するも、生前効なきことも、死後に至つて其日記を見てその心事に感じ涕を流して其志に酬ゆると云が如きは、世に珍らしき事

にあらず、一家の歴史たる日記を注することと決して、輕んずべからざる也、或は一家の妻君たるもの、多忙にして此事に當るの暇なしと云ふか、寢に就くの前二十分を費せば事足るべし、初めは煩しく思ふも、後には樂しく思ふに至るべし、余は家庭雜誌の讀者が、先づ之を試みて、後は朋友にも及ぼさんことを望むもの也、

勤勞

愛山生

樂は夕顔棚の下涼み男はてゝら女は二布して、是快樂の眞趣なり。鷄鳴と共に起ち、日中に勞作し、日斜に還り、妻子團欒して歡び語る、胸中一點の邪念なく、半點の妄想なし、其爲す所正直なるが故に其樂しむ所も神聖なり。

勤勞を以て苦痛なりとするものは、人生を以て地獄なりとする者なり、人をして世を厭はしむるを敎ふるものなり、然れども勤勞は決して苦痛に非ず、無事は人をして死せしむるに足る。誠に農夫をして耒耜を把るとなからしめ、商賈をして店頭に坐りて牙籌を把らざらしめ、兵士をして銃砲を肩にせるとなからしめ、政治家をして政治を論ぜざらしめ、詩人をして詩を作るなからしめよ、彼等は忽ちにして水を離れたる魚の如くなるべし。即ち知る勤勞は彼等の氛圍氣なるを。彼等の生命を有し、元氣を有する所以の者、此に存す。人の功名富貴を求むるや、營々として勤勞す、樂は實に此中に在り。而して其得たる所の功名富貴は却つて己を滿足せしむるに足らざる也。是猶婚姻の樂は正に許婚の間に在り、若し室を同ふするに至りては、乃ち興味寂然たるに似たり。此に知る造化の意、人をして一生休息せざらしむるに在るを。此に知る人生は即ち勤勞なるを、勤勞は即ち快樂なるを。

豐公一世攻伐を事とす、彼れ無事を樂しむ能はざる也。今や最愛の一子を失ひ、愈無聊に堪へず、朝鮮の一役實に此に因りて起りしなり。彼其心を此に因りて慰めたり。彼を以て其好敵手たる徳川家康が、晩年を經國

の大業に費せしに比すれば、甚だ邪徑に陷れりと雖も、而かも大なる心は大なる勤勞に因りて慰むべきの一事は、此に因りて知るを得べし。天下を經するの術は、人民をして安息せしむるに在らず、人民をして其能力を善く用ひしむるに在り。即ち正經なる勤勞に從事せしむるに在り。

哲學者、往々深遠なる哲理を窮め、是に因りて以て安慰を得んと欲す。然れども彼等決して己の哲學に滿足する能はざる也。彼等の心は己の哲學の善弟子たる能はざる也。彼等決して人生の歸趣、宇宙の運命を見破る能はざる也。たとひ恍然として悟り、豁然として通ぜしが如く思ふとありと雖も、暫らくして群疑滿腹、亦爲す所を知らざらんとす。此に於て彼等は更に第二の研究を始め、切々偲々日夜此に從事す、樂乃ち此中より生ず。彼等は既に研究し得たる哲學に滿足する能はざるも、更に新しき哲理を發見せんとする勤勞に於て樂しむを得るなり。奇なるかな彼等の樂は其哲學の中にあらずして、其哲學者たる勤勞の中に在り。孔子曰く若ニ聖與一レ仁、則吾豈敢、抑爲レ之不レ厭、誨レ人不レ倦則可レ謂ニ云爾一已と、彼が憤を發し、食を忘れ、樂しんで以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らざりしもの、實に不レ厭不レ倦の四字に在り。

ブライアント氏詩人を警誡して曰く

詩人の名を同胞の中に保ち、人心中に活きて存せる思想に、火焰の言語を衣せんと欲する爾よ。恍惚たる夏日の消閑に、不朽の詩を作り得べしと考ふると勿れ。

爾の全力を集め、之を汝が詩句に注げ、靜かなる朝、すさまじき夕に於て、爾が獨り在るとき、熱き潮が爾の血管を駛する時、燃るが如き言語を流暢に注ぎ出せ。

詩人は生れたるものなり、作られたるものに非ず、然れども詩を作る亦田を作るに同じ、必らず額に汗せせざるべからず。而して是れ詩人の快樂なり。天下何事か勤勞せずして成るの事あらんや、何の勤勞か其中に多少の快樂なきものあらんや。

夜の家庭

敲日生

天國は此處にあり、地獄は此處にあり。夜の家庭は、一方に於ては則ち天國たり、他方に於ては則ち地獄たり。天國の喜を得るも此處にあり、地獄の苦を得るも此處にあり、既に成人して世に出でたるものは兎も角も、未だ人情世故に通ぜざる數多の子女に在っては、其の身を措く家庭に於て、殊に夜の家庭に於て、感化を蒙ること著きもの之ある也。

何をか夜の家庭に於る天國と云ふ。善良にして清潔無垢なる一家團欒の時を指す也。父母幼兒を慰め、長兄父母をいたはる、其の語る所、則ち聖賢君子の事也。其の教る所、則ち人間倫常の道也。若くは古來英雄の迹を美とし、若くは今日烈女の業を賛す。面白くうちとけたる談笑の間と雖ども、決してあさましき事あるなく、云ふべからざる樂、此の中にあり。其の樂の自然なる、融然相和して流るゝが如き、何を以てか比すべけんや。是れ其の感化の、英雄吉士を作る所以也。賢婦烈女を作る所以也。若くは己れの義務を重んずること、其の生命の如くする者、若くは最も能く其の國を思ひ、其の民を愛する純良の市民を作る所以也。斯る家庭は則ち一個の天國にして、此の中に生ひ立ちて世に出る少年子弟は、實に生れながらにして天國の樂を得たるもの也。

何をか夜の家庭に於る地獄と云ふ。良人三日家に歸らず、口喧ましき細君は、まつはり來る數人の兒女等を罵る也、叱る也、手を擧げて擊てる也、泣かせる也、而して兒女等の飢を顧みず。若くは數多首を集めて、樂し氣に相語るも、其の語る所、卑猥にあらざれば、浮きたるいま／＼しき事ども也。其の樂し氣に見ゆるは、節制なくみだりがはしき樂也。彼等は韁なき野驢馬の如し、愚にして身の程を悟らず、おのが自恣のみ行ふて、少しも憚なき輩也。斯る家庭に養はれ、斯る家庭に交るは、禍にして詛れたる人の子也。彼れの額に受る所は、則ち地獄の燒印也。其の苦痛、其の耻辱、

生涯身に附き纏ふ也。悲しからずや。
何國にありても前者の如き家庭は多からずして、後者の如きもの少なからず、世の女子を有し、之をして恥しからぬ生涯を爲さしめんと冀はゞ、大に鑑むべきは勿論也。

家庭をして善良ならしめんと欲するは何人も願ふ所、今更細論するの要なし。唯だ子女の爲に夙に慮る所あらば、先づ差し當り、是非とも實行してほしき事あり。

第一、子女をして夜遊の悪習に陷らしめざる事、

第二、外泊外宿などの弊風に染ましめざる事、

此の二也。若しも天國の如き家庭に友を訪ふの子女あらば、そは最も喜ぶべき也。然りと雖も地獄の如き夜の家庭に清潔無罪の子女を放つは、是れ無慈悲なる事にはあらずや。彼等をして他日墻を越へて走るが如き者とならしむるは、豈に情なき至ならずや。放逸、無法、破廉恥、不道德の無頼者と爲すは面目なき事にはあらずや。悪風に染み、悪習に溺る、救はんと欲するも遲き也。况んや斯る家庭に在つて一夜を送り、斯る腐敗の空氣中に宿泊す、其の危險、炭酸瓦斯の中に投ずるよりも甚しく、直に魅せられて頓死する也。精神的に頓死する也。慨くべきの至にあらずや。

人或は之を以て、子女を保護することの、餘りに過ぎたるを難ずるならん。獨立の精神をして、消磨し盡すに至るものなりと難ずるならん。子女の自由を束縛して徒に其の窮窟を感ぜしめ、却つて取り返へしのならぬ事を仕出來かすに至らしむべしとて難ずるならん。然りと雖も斯る事は獨立の精神を消磨するにあらずして、寧ろ益ゝ其の發達を促すもの也。(何となれば薄志弱行の友に接せざれば、他に依頼せんと欲するが如き念起らざれば也。)自由を束縛するの所以なし、寧ろ益ゝ自由ならしむるの階段也。(何となれば人一個の思慮發する比に其の性情明白にして疑ふべき所なく、其の品行修つて間然する所なきに至らば、父母は之を放つて、何處に遣るも更に心配する所なきが故に、其の志す所を爲すに任すべければ也。)是れ豈に父母と其の子女との間に、収め得べき兩様の利益にあらずして何ぞ

や。是れ豈に人の父母として、天下國家に有用の人物を作り出だせる光榮と、聲望とを收め得べき所以にあらずして何ぞや。其の關する所、斯の如く大也。夜の家庭、亦た決して輕視すべきにあらざる也。非耶。

女學教師を論ず

白雲生

行く〳〵一家幸福の母となるべき責務を有せる、妙齡の女子を教育する學校の教へが、口舌言語の學習に流れて、躬行貞靜の練磨に乏しきは、見る毎、聞く回、遺憾の思ひを爲さずんばあらず。

成らうことなら、女子は固より男子と雖も、中年以下の教育は、之を婦人の教師に依托せんと欲す、經驗老熟なる老年の婦人教師に依托せんと欲すれ共、今日に於て未だ其人を得べからずとせば、止むなく之を男子たりとも、老年少なくとも四十歲以上の教師に托するの必要を感ず。

何を以て之を言ふやと云へば、妙齡子女の學生が紳士風を覺へ、貴族令孃風に化し、辯才口給を事とし、高談粗行に荒む等は、皆な概して壯年未熟、才子肌、女英雄風なる男女教師の見覺へ感化たれば也、而して是れ殆んど今日の實況たれば也。

音樂に上手に、英語の對話に立派に、美術の技藝に熟し、理科の學說に通じ、心理の熟語を語り覺へしと誇る學生が、家に歸りて父母長上を凌ぎ、奴婢家隷に高ぶるを見る者は、如何に今日の學校が他日の家母を造るに麁末なるかを知らん。

日常學習の口授筆記、西洋學問の生ま調理に過ぎて、聞き慣れざる西洋學者の人名を記し連ね、直譯生硬の文句幾十となく書き綴られ、其教師を聞けば、泰西に學修せし履歴を有し、口授は原書を捻ね繰りつゝなせると云ふの類往々聞くに少なからざる所、以て今日の學校教育の一般を知るに足る。

好んで誹謗惡口を爲さんとに非らず、斯くの如き教育の行はれ、其教育の下に成育せる、滔々たる子女が、先き〳〵一家の母たり管理者たるの覺束なきを憂へて

云ふなり、如何にして之を救ふべき、中年以下の子弟殊に女子の教育は、之を老年の良教師に依托するの途を開くに在り、生意氣ならざる教師の下に、生意氣ならざる生徒は出來。

科學

科學の快樂

理學と云ひ、化學と云ひ、動植物學と云ひ、乃至天文學、地文學、金石學など云ふものは凡て乾燥なる事を列べ擧げたる面白くなきものなるが。試みに婦人の房やかなる頭を飾り、錦の上に花を添ゆと云ふ珊瑚の一つを取つて、之を生物學者と云はるゝ人の前に出し、これ何物なるかと問はゞ、生物學者は鼻うごめかして、「珊瑚なるものはラヂエート屬の内のポリツプ族に屬する動物の作る所ろのものなり。此動物の軟らかき體は或る物に附着し、口は上方に開き房の如くに列る。此の虫が海水中の炭化石灰を取り其の體中より分泌して生じたるもの之を珊瑚と云ふ。化學上より觀察せば珊瑚は炭化石灰也、生物學上より云へば動物の殼なり、地理上より云へば熱帶地方の特産なり」など、六ヶ敷言を說き出すならん。かくては立派なる珊瑚も甚だ譯の分らぬものとなり、却つて講釋を聞かぬ方まされるが如く思はるべし。科學なるものは此の如く六ヶ敷く面白からぬものなるか、否、科學の快樂は小說の快樂の如く、其の面白きとは小供の時に祖父、祖母の昔し噺を聞くよりも面白し。瘤取の話、龍宮の話、舌切雀の話、此等のものは科學の中にある也。「弓張月」と云ふ小說を讀み玉ふたる人は記臆し居らるべし。琉球の深き山の常は人の行き通はぬ處に絕えず鈴を振る音聞えけるが、之を探れるものありて其の鈴の音は地の中より出づるものなることを知り、國王に奏して人夫を引き連れ、鈴の音を目あてに地を穿りたるに一つの石櫃を穿り當てたり。さてこそと思ふ間もなく黑雲立ち塞がりて一時は咫尺をも辨ぜず、只だ鈴の音の

み聞えける。暫時ありて雲晴れ霧收まりて見れば石櫃の上に端然と坐せる一人の偉人ありける。此の處は昔し琉球を切り從へたる王が國に禍なす大蛇を埋めたる處とて、數百年を經て大蛇化して人となり、今穿り開かれて初めて世に出でたるなり。此の偉人後に朦雲國師となりて暴威を振ひ國中に禍ひし、國王を殺せしが、此の時鎭西八郎爲朝琉球に渡り來て、圖らずも王女の夫となり朦雲を殺して國王の仇を報じ國を安らかに平らげたり。さて、弓張月にある話を摘めば此の如きものなるが、科學の中にも之と違はぬ話ありやと云へば石炭の話しこそ尤も適したるものならん。詳しきことは後に措き、其の要點のみを云へば、昔し埋められたる大蛇が、年を經て朦雲となりし如く、石炭もも



とは何萬年の昔し地上に生ひ茂りたる大木にして地球の變遷にて地の中に埋められ、年を經るまゝに石炭と云ふものに化し、地の中にて鈴こそ鳴らさねど、其の在る所は技師に知れ、坑夫の爲めに掘り出され、製造場に入り、朦雲の勢もかくやと思はるゝ計り凄まじく黑烟を吐く、石炭の世に出づる前は世の人は重に水力のみを用ひしが、石炭世に出でてより、朦雲が琉球王を亡ぼせし如く水力を用ゆるもの益々少なくなれり。尚ほ世の進み行くにつけ、爲朝と王女との出で來る如く、水力を用ひて作りたる電氣力出でゝ石炭を亡ぼす如きことあらん。我國にては昔し源平の合戰に奈須の與市宗高は扇の的を射て其の譽を後の世に殘せり。與市が見えぬ要を射りたるは人の驚き異しむ所ろなれ

ど、今日となりては、天文鏡を用ゆれは目の前にありて見えぬ瓦斯を、九千百萬哩も距れたる太陽の表面に見、此は何瓦斯、彼は何と區別することさへ出來べし。科學の話は皆な此の如し、かくても尙ほ科學は面白からぬ六ヶ敷ものと云ふ人あるべきや。

或る人が理科仙郷との名を用ひしも宜なり、科學は六ヶ敷ものにあらで、却つて仙郷の如く快樂多きものなるをや。さらば如何にして此の仙郷には入るべきや、くだ〳〵しけれど少しく案内の栞を述べん。

此の仙郷は遠きにあらず、目を開けば直ちに目の前に在り。科學には勢力と名づくる仙女あり。誰にても郊外に出で草の上に坐し、風の吹くを聞き、水の流るゝを見、其の音を聞き、花の開くを見、鳥の歌ふを聞き、草の生長するを見は、此等のものゝ中には皆な夫れ夫れの仙女宿り居て、晝となく、夜となく、夏も冬も、昔し噺の仙女よりも不思議なる魔術を使ふを見るならむ。木には舌あり。流るゝ川に書あり、石に說敎あり、凡てのものに何か善きものありて昔し噺よりも面白き話を語るを聞んか。之を見、之を聞くに尤も必要なるものは想像力と云ふものなり。桃太郎の噺を聞きて我が目の前に眼大きく鼻高く肥え太りたる桃太郎の見ゆる如く科學の噺を聞くにも、見えぬものを想像にて見ること第一の必要なり。尙ほ一つ必要なるものあり。其國に入るには必ず、其國の語を學ばざるべからず、科學の仙郷に入らんとせば、必ず仙郷の語を知らざるべからず。されば既に其の目を開き何物かを見んと思ひ、既に想像力を有し、之を働かすことを知る人はいざ來れ、科學の仙郷に案内せん、行く〳〵仙郷の語を學び、昔し噺よりも面白き噺を聞き、昔し噺の仙女よりも美しき仙女を見ん。昔し噺の面白きは子供たりし時小說の面白きは若き時のみなれど、科學の面白きは小供たる時より、成長なり、白髮の老人に至るまで常に變るとあらざるべし。

史談

ガリバルヂーの妻

婦人の戰場は家庭にあり平和の社會にあれど、時宜によりては牧羊の杖を三尺の劍に代へて英軍を打靡け佛國を救ひしヂアン、ダアクを學ばざる可からざることもあるべし。地中海の北に長靴形に横はる意太利王國創業の三英雄の一人、愛國義俠の魂を溢るゝばかり六尺の軀に盛りたる勇將ガリバルヂーの初めの妻は、亘人に愧ぢざる希世の烈婦なりき。

ガリバルヂーの妻は名をアニタ、リヴエロと呼び、今を距る七十年前南亞米利加サンタカザリナの地に生れたり。此地は熱帶にありて、人の心は草木と共に暢び、深林三方に垣をなして外との交通もなければ、文化の光りを受けざる代りに其民淳樸の風を失はず。旅人此地に來れば、設けある客室にツト通り、呼ばざるに家僕來りて靴をぬがせ足を洗ひやり、斯くて幾日なりとも隨意に滯在し、去る時は一片挨拶の言もなくて直ちに出で去るの習あり。其民の古朴なること推して知るべし。アニタ此別天地に生れて、左したる敎育を受けず、村より以外の世界を知らず、橐駝師の手を借らぬ野生の花の如く自然を師とし天性を母としておのがまに〲生ひ立ちたり。斯りし所に、意太利の英雄ガリバルヂーは當時三十左右の血氣盛りの壯年にて、已に本國に於て早くも革命の企に加はりしが、事成らずして南亞米利加に逃れ來り、其時ブラジルに對して革命の旗を飜へせるリオグランドの民を扶けてイタパリカと名くる一隻の軍艦に乘り組み、恰かもサンタ、カザリナの海岸に碇泊し居れり。一日ガリバルヂーは望遠鏡もて磯邊を望み居りしに、丈高く手足しなやかなる瘦形の少女の黒髮長くさげたるが、磯際の井戸に水汲む姿眼にとまりぬ。此れよりガリバルヂーは日々望遠鏡もて其少女の出で來りて水汲むさまを望み見、其歸り行く家を認めて久しく沈吟し居りしが、一日忽ち

心を決して、小舟に取のり岸に漕ぎ寄せ、幾日か目を離し得ざりし其茅舎に入り、彼少女に遭ひて、直ちに「御身は吾妻となり玉ふべし」と言ひ出でたり。此れぞ南米の勇婦意太利の英雄縁を結ぶの初めにて、此れより十二年アニタは百戰の危を冒して終に夫の傍を離れず、其良人をして「余は眞に隠れたる寳を見出せり」と云はしめし程、婦人としては眞心深く、妻としては貞實に、母としては愛情いとも深かりき。

ガリバルヂーの一生は危難に寢ねて彈丸の中に起きたるの生涯にて其妻アニタも亦躬ら銃をとりて敵に向ふこと屢々なりし。結婚の後初めて海戰に遭へる時、ガリバルヂーは其妻に陸に上りて危きを避けよと祈るが如く請ひたれど、妻は頭を掉りて從はず、ガリバルヂーも亦竊に吾妻の勇を誇りつゝ再び之を强ひざりき。已にもして戰はじまり、落つる銃丸霰の如く、忽ち天に轟く響と共に一發の砲丸空を截つて飛び來り、水夫二人斃れ、アニタも亦倒れたり。最早微塵になりつらむとガリバルヂーは狂氣の如く走せ來り見れば、水夫は血に染みて仆れ居たるもアニタは些の疵もなく靜かに起き上りぬ。ガリバルヂー今はたへかね、無理に勸めて甲板を下らしむ。其時アニタは靜かに答ふる樣「サラバ下り候はむ、サレド隠れ居る卑怯者等を驅り出す爲めにこそ下り候はむ」と。暫くありて彼女は果して右手に白刄提げつゝ、逃げ隠れたる髭のみいかめしき水夫等を驅立てゝまた甲板に上り來れり。

亦曾てガリバルヂーは已み難き急要ありて、暫時船の指揮をアニタに委ね置きつゝ陸に上りぬ。然るに其間に敵の船は滿帆の風に乘じて間近に迫り來れり。ガリバルヂー要事果てゝ船に返り見れば、アニタは早く已に砲門を開き發砲を初め、朗かなる聲ふり立てゝ號令を傳へ戰士を勵まし居たり。此戰に味方の三艦の將校皆盡く斃れガリバルヂー一人殘りし程の血戰なりしが、黒髮長く面美はしき彼勇婦の姿は紫髯の偉丈夫の影に添ひて暫らくも甲板を去らざりし。ガリバルヂーが其妻に兵士の指揮を委ねしは此時のみにはあらず、また陸上の戰にも彼女は常に馬に騎して夫と共に敵

中に乗り入り、赤手負に綳帯を施し看護をなすこと数々なりき。

タクアリーの戰にアニタが騎りし馬敵の彈丸に斃れアニタも共に倒れ、生憎臨月近き折なりしかば、程なく生れし其子メノッチの頭には疵の痕ありき。此兒を生みたるはロスパトスジョンの半島のあさましき牧舎にてガリバルヂーは赤兒を包まん手巾すらなく母を養ふ術もなければ、助けを求めむと母子を殘して他に赴きし其留守に、敵は忽ち此隱れ家を知りて一隊の兵ガリバルヂーを捉へむと不意に襲ひ到りしが、氣丈のアニタは二週にも滿たぬ孤兒をかき抱き身を躍らして馬に飛び乘り、驀地に驅けて林中に逃れ、ガリバルヂーの援を得て歸り來るまで饑へ凍へ雨にさらされて林中に潛み居れり。リオグランドの戰ひの後は、雨降りしきりて全地沼の如く人馬徃々土中に沒する程にて其苦難非常なりしが、ガリバルヂーは馬上のまゝに三月の孤兒を手巾に包みて吾頸より懷につり新蕨芽よりも軟らかなる孩兒の手足を己が呼吸にて温め、アニタも亦只其兒を氣遣ふの外一語の吾苦を訴ふることなかりしといふ。

斯くてアニタは更に一子一女を擧げ、ガリバルヂーと共に意太利に歸りて獨立の戰に從ひしが、其處より彼處へと敵に追はれ熱病に惱まされ早産の苦痛に惱まされて、流石の勇婦も終にアドリアチックの海邊にて夫の腕に倚りつゝ二十六歳を一期として逝きぬ。折しも敵の追撃急なりければ、葬儀營む間もなく其まゝ松林に假埋せり。後ち取り出して棺に盛りて程近き寺院に移し、久うして意太利の亂おさまるに及びガリバルヂーは其子其女と共に寺院に來りて其棺前に跪きて哀哭し、幾行の涙と共に柩をニースに移して此處に正式の葬儀を營みたり。斯くて此勇婦の遺塵は風和らかに日朗らかなるニースの寺の無言の石碑の下に音もなく横はりたれど、朽ちざる名は其夫の大名と共に相並びて歷史に殘れり

開發的教育の實例

玉菜もてワシントンの名を書く

溫良剛毅の英雄ワシントンが幼けなきとき、父の愛撫せる櫻樹を切斷したるとを、隱さずして明らさまに告げしことは、皆な世人の知る所なり、然れどもその源をたづぬれば、深くその父母の善良なる敎育より出で來りしなれ、

彼の幼時、父母は數ば〳〵世界には上帝ありて正邪を監視すれば、正を蹈みて恐るゝことなかれ、惡をなして隱し得たりと思ふことなかれと說き聞かせしも、高尚なる道理の小兒の腦中に入り易からずして、徒らに耳より入りて耳に抜けんことを恐れ、父はこゝに一の敎育法を案し出したり、

ある日のとなりき、彼の父は兼てワシントンが好みて散步する園の一隅に杖を以てジョージ、ワシントンと云ふ字を書き、その字の上に、玉菜の種子を蒔きたりき、やがて程經たる後、種子は日光と雨露とに育てられ、青々たる玉菜は、美麗にもジョージ、ワシントンと活きたる文字を現はせり、ワシントンは常の如く、或は小車を曳き、或は小馬に乘りなどして、園中に戯れありしが、ふと一の驚くべきものを見出せり、彼はかの玉菜の邊に立ち止まりて之を見つめたり、讀めば正しく己が名を顯はせり、二度三度繰り返して、大に疑ひ始めたり、されど綴りて讀むにやはり己が名に相違なければ、即ち父の元へ馳せ行けり、

ワシントン　父上余は園中にて驚くべきものを見たり、

父　然るか、ソは如何なるものなりしや、

ワシントン　急ぎ來りて見給へ、父上、余はかゝる奇妙なるものは、兼て聞きしことなし、

父はその子の見しものを疾くより推して餘りあれば、その導く方角に隨ひしが、ワシントンはもどかしく思ひて、その足を前に進め、指を以て玉菜の文字を指しつゝ

ワシントン　マア父上これを見給はざるや、こゝに余の名が、かく青く生ひ出でたり、如何にしてかくなりしや、

余はかゝる驚くべきことは兼て聞きしことなし、

父　然りそは驚くべきことなりし、されどそは多分偶然に出で來りしならん、

ワシントン　否々、かゝることが偶然に出來べき筈はなし、

父　然らば如何にしてかくなりしや、

ワシントン　余はその如何にして出來しやを知らざれども、余はかゝる事が偶然に出來るとは信ぜず、多分人ありてかく種子を蒔きしならん、父上、こは父上の爲し給ひしにあらずや、

父　我が子よ汝は遂に云ひ當たり、余實に之をなせり、

ワシントン　されば如何なる目的ありてこれをなし給しや、

父　それこそ汝に一の大切なる事柄を敎へんと思ひたればなり、

ワシントン　種子を蒔くに付きてか、

父　否それよりも一層大切なることなり、余は汝に天地の間に上帝の存在して、正と義とを助すくることとを敎へんと欲するなり、初め余が偶然ならんと答へしとき、汝が滿足せざりしは何故なりや、

ワシントン　そは誰れか植えしと思はるゝ樣に生へ出でたればなり、

父　されば如何にして人が植えしと云ふことに氣付きしや、

ワシントン　そは何か意匠ありて人の爲せしが如く思はるればなり、

父　汝の言ふ事は正し、植物がかく美事に生ゆるは、偶然にはあらじ、必ず他に意匠を有するものありて、之を仕組みしに違はじ、今目を飜へして汝の周圍を見よ、汝の周圍には美はしき天地あるを見るべし、その如何に良く、萬物を配當しあるよ！、寒空には薪ありて以て溫暖を取るを得べく、渴せし時は水ありて飲むを得べく、耳ありて聞き、目ありて見、足ありて歩行す、千百の物皆悉くその意匠ありて作られたるを見る、これ必ず之を仕組みしものあるを證するに足るなり、

ワシントン　父上よ余はその誰なるを知る、その意匠者こそ即ち上帝ならめ、

父世界には實にその主なる上帝ありて、正邪を監視し、正しきものを助くると明かなり、

ワシントンは遂に無言になり、何にか非常に感ずるもの丶如く、頭を垂れて考へたり、彼が後に至りて輝くばかりの事業を歴史に止めしは、實にその父が幼少より『正を蹈みて恐るゝなかれ』と云ふ訓誨を垂れ、彼をして自然に之を覺しむる樣に勉たるによると云ふ」世の父母兄姉が、少き者を敎ゆるや、單に正は爲さゞるべからずと云ふ樣なる事を、頭より注ぎ込むのみにて、ワシントンの父の如く、企圖あり、信切に、且つ勉めて其智惠を開發せんとするもの少なし、是れ其成功せざる所以ならん、

文藝

嬰兒

一一生

嫩楓のやうなる小さき掌、早蕨のやうなる柔かき拳、之を以て胸を撫でられ、乳房を捜らるゝ母の心は、子を愛する一念に滿たされて、好き衣、甘き肉、さては旅行、會話、名譽の競爭なんどを思ふの暇あらず、天國あながち遠きにあらず、嬰兒の如くなれば、其心は天國に住へるなり、嬰兒は一家の人を同化して天國に入らしむ、



愛しき嬰兒、彼れ玩弄物中に於て、動物の形貌に造りあるものを好む、而して鼻目明かならざれば喜ばず、彼れ動物を見ざりし以前より然り、蠅と蟻とを見るに及びては、玩弄物を棄てゝ、蠅と蟻とを一生懸命に見つめ居たり、既にして犬を喜

び、鷄を喜び、馬を喜び牛を喜び、また最も車に乘るとを喜び、泣き居るときにも車に乘れば、泣き止むやうになりたり、

夏の夜に銀座通りへ背負ひ行けば、百萬の燈火と囂々然たる人聲とに、呆れ返るもの丶如く、兩手をあげておろすとなし、

母は乳を呑ませるもの、父は己れを躍らせるもの、守り女は己れを背負ひ出づるもの、嬰兒ながらに斯く心得てをるが如きは殊勝なり、

湯に浴しては、戯れさわぎ、鏡に向ひては、おのが影をつかみ取らんとしてあせり、近隣の小兒等唱歌に餘念なき時は、彼れも聲を揚げて和す、彼れを見誤りて、お孃さんと呼ぶ人あれば、祖母は彼れを抱きて小便せしめ、小便の出づると出でざるとに關らず、たゞそれとなく男兒なるとを示して安心するなり、

彼れは晩の八時頃より寐ねて、朝六時頃に醒むるが通例なり、而して毎日午前、二時間ばかり寐ね、午後も二時間ばかり寐ぬ、

彼れは乳を呑むの外、鹽せんべい、薩摩薯、味噌粥なんど、大人の一口ばかりを食す、

むさしの

（紀貫之書）

ゆかり

薩摩琵琶は戰國の遺響あり。之を音樂中の位地より見れば未だ遽に重しとす可らずと雖、其壯悲の調人をして躍起せしむるとは亦多とするに足る、『武藏野』は其一曲なり、本と厭世的の理想に由りて作らる。然ども、詞辭優に、格調高く、自ら搖曳の態あり。其曲に云く、

武藏野に草は種々多けれど。摘菜にすれば偖も少し。皆人は。若き時より唯徒に日を送り。才智藝能なき人は。寶の山に入りながら空く歸る如くなり。偶々此の世の人間に生れ來て。眞如の珠を磨かずば。人と

生れし甲斐もなし。只人よりは。あさく思はれて。犬の年老る如くにて。朽ち果ること無念なれ。又いつの世のいつの時にかみがくべし。頼まれぬ世にもある哉。月鼠騒ぐ草葉の露の身なれども。高位長者の身となりて。七珍萬寶滿々て。榮花にほこる樂みも。一夜の夢の如くなり。歡樂極まりて哀情多しと。古人の文に記さるゝ。去ればにや生々世々の樂も。心の中の月や花。是を樂む人はまた。會者定離生者必滅の世の習。春過ぎ秋は蟬の聲。扨もはかなき浮世かな。引き寄せて結べば草の庵にて。解くれば元の野原なり。「少しきを足れりとも知れ滿ぬれば。月も程なく缺けて行く。十六夜の空や人の身の上と知られけり。

人若し其係り結びのたしかならざるを言はば是れ音樂を知らざる者のみ。樂詞は聲調に由て言外に起結をなし。或は半を言て半を推さしめ、或は一を述て二を意味す。要、單簡なる言詞により聽く者をして幾多の感想を聯起せしむるにあるなり。此間に詩の妙味存す。

この度は他の欄に思ひの外紙幅を奪はれ候まゝくさ〴〵なる詞の花いづれも次號に御目にかけ可申候

家政

齊家一斑

織り、縫ひ、紡み、績ぎより、萬事萬端に至るまで、大家婦たるものは心得置かざる可らずとせし時代には、婦人は家事を整理することに長じたりしが、世の移り變るにつれ、社會の驕奢となるに隨ひ、所謂貴族的なる風となり、位置ある婦人とは『下女下男の使ひ方も知らず己れの衣服飲食のためには手足を勞せざる者』との定義を呈するに至りしは歎かはしき事なり、かゝる人々の第一に知るを要することは『下女下男は

たゞ一の助手にして、家事を一任すべきものにあらざると』是あり、ある人は財産ある家の主婦にして、其子女をして下女下男の間に立ち働かしむるものを見て、そは殘酷なりと云ふものあり、されども此の母こそ、眞實子女を愛するものと云ふべし、幼時より自ら困難を甞めたるものは、長じて後、他人を思ひやるとを知り、困難に處するの道を知り、奴婢の使ひ樣を知るが故に、自分家を持ちて後は、巧みに一家を治むるを得べし、然らざるものは一時安樂の樣なれども、後に至つてその苦しみ大なるべきなり、下女下男を使ふに方りて心得べき要件二三を揭ぐ

（第一）　最初の宣告

下女下男の習ひより、夜遊びを好み、寄席へ行き、或は買ひ食ひなどの不行儀を爲すものあるは、人々の共に困る所なり、こはその初めに雇ふ時の約束によりて、大に更まるものなり、下女下男の最初に我家に來りしとき、余が家風はかく／＼なり、もしそれにても堪へ得べしと信ずれば來るべしと、嚴重に云ひ渡すにあり、いかなる癖あるものと雖も、初めは能く謹み得べし、やがて其後に至り、能く家風を吹き込みて、豫ての習慣を矯め直すべし、

（第二）　婢僕の敎育

人に使はれんことを望む位のものは、敎育なきは云ふ迄もなき事なり、敎育なきものは是非善惡を識別するの力に乏しく、世の惡風に隨ふこと速かにして、又時に主婦の命ずることを解せざることさへ屢々ありて、大切の時に間に合はざるもの少なからず、間に合はずとてその度々に免職し、果ては一ヶ月に二三人も更迭するものあるは、珍らしからぬ事なり、然れどもこれ決して好きことにあらず、主婦にして少しく氣を付くれば、彼等とても決して變化せざるものにあらざれば、主婦たらんものは、己れの暇を割きて物の道理を敎へ、事に應じて爲すべきの道を敎へ、人として爲さゞるべからざる職務を敎へ、かくして之を使ふときは大に主婦の手助けとなるべし、

（第三）　嚴肅と温愛の分量

人を使へば苦を使ふと云ふは、實に明言なり人を使ふに嚴肅過ぐれば、怨みを承け、温愛に過ぐれば狎々しくなりて、命令に隨はず、殊に教育なきものは、自分にて調度を爲し能はざれば、主人よりの見計ひ一つによるものなり、されば、その嚴肅と温愛の分量は、幾何を以て適宜なりやと云ふに、使はるゝ人により大にその度も異なれども、先づ通常嚴肅六分に、温愛四分位を最良とす、温愛を少なくするとて、勿論下女下男を愛するの分量を減ずると云ふ意味にあらず、下女下男に餘りやさしきに過ぎて、過失を矯むるともせずして、只だそを賞めはやす計りなる時は、遂にはなれ〱しくなりて、主婦の威嚴行はれざる樣になれば、あまり、喋々し過ぐるが如きことなきを云ふなり、又使ひ人の中にはまゝ主人の物品を掠むる如きものあれども、こは多くは主婦の威嚴足らず、締りなきによるものにして、能く締り能く使ひなば、多くはかゝるとは爲し能はざるものなり、

(第五) 譴責

下女下男に過失ある時、妄りに過責せざるを要す、誰れにても過は之を爲さんとして爲すものなければ、その過を責むると酷に過ぐれば、感情を害して、反て益なし、これに引き更へ、之を責むるとなくして、靜かに云ひ聞かすときは、恩に感じて一層心掛けて働くべし、これ誰れも知る處にして、而して行ひ易からざる事なり、

社交一斑

流行の帶どめ　美妙

變遷定まり無く、さしも時めいたパチンも今は稍すたれて新たに復古を粧つて出て來た新奇のものに本領を奪はれる事となつた。その新奇のものとは外でもなく、以前パチンがまだ盛んに爲らなかつた頃、非常の勢力を以て流行した打ち紐の帶どめで、こゝに殆んど二十年間蟄伏して居た勢ひが終に反動と爲つてあらはれた。

今參考のため舊日の此帶どめの形勢を略言すれば、そのはじめは素より古くて、今言ふほどの必要も無し、德川氏の末年に至つていよ〳〵進步しいよ〳〵完全し、明治に至つていよ〳〵變はつた。パチンの製作が決して明治以後で無し、たゞし明治以後、しかも近頃までのほどの品は明治前にあるべくも無し、概言すれば明治以前はむしろ打ち紐の占領した世であつて、以後は全くパチンのであつた。明治以前、しかもその時代の服飾世界に一方の勢力を逞しくして御殿女中の多數には即ちその非常の勢力のしるしとして打ち紐のが行はれた。あるひは平うち、あるひは籠目、あるひは角あみ、あるひは石だゝみ、あるひは千本條、あるひは丸うち、いづれ樣樣な流行をあらはして、兎もすれば――その今のやうに金銀寶玉などの粧飾を入れぬにも拘はらず――肝心の帶と頡頏するくらいの價格になる迄の事實が有つた。

一旦金具のついたパチンに橫をつかれて、其前からいくらか世人に飽きられかゝつた矢先とて、さしもの力も終に空しく、やみ〳〵と粧飾世界をこの新來の强敵に占領されたのは實に明治八九年の頃であつた。

その以來パチンの流行は今こゝに言ふ迄も無し、その何のくらゐ流行したかは今日迄の粧飾界に是より外の帶どめを見出し得ぬとの事實をたしかめただけで充分である。が、やがては飽きられる。天數のさだまる所、おなじ形ちで是ぞといふ變化が無く、自然に人は他の珍らしいのを渴望した所で、つまりは昨年に至つて改革の先鋒として、護謨心のもつとも簡略なのが世に出た譯。

今に爲つて顧りみれば、此護謨心の打ち紐の帶どめもその實後ぞなへを呼び出す先鋒であつた丈の事で、その持ちの弱いことを、そのしめ方がやはり瓢簞などを用ゐて大した相違をパチンとの間に有たぬことが、料らずも純粹の打ち紐を呼び出させる根であつた。はや今と爲つては流行に走る事の速やかな向きには打ち紐の帶どめが行きわたつて、夜會などの貴婦人の帶の上に、珍らしく綰ねて結ばれたものが多く見える

やうに爲る、いよ〳〵流行の勢ひは今日すでに明白に爲つた、これもまた自然の數、かうあるのも至當なことで、その何としても、割りあいにパチンより廉價である段、及びパチンと違つて隨分他の役(物などを結びからげる)に立つ段の經濟的である事は斷じて此の打ち紐の長所として數へてもよさゝうに思はれる。

よしや流行を逐つてその奴隷と爲らずとも、それに甚しく後れぬといふ事ならば、此頃はパチンを廢して、打ち紐にした方が今後すこぶる長く用ゐ得られる望みも有る。

育兒小話

稚子の入浴

且にその稚子を愛する慈母は、稚子の入浴を人手に委ぬべからず、稚子を入浴せしむる時程、その子の健康の樣に付き觀察なし易き時はなし、骨の違ひし所、腫物の出來し所、或は外に見はれずして内に痛ある所などは、この時に見出し、若しくは察することを得べければ、兒子一生の健康の基礎は、正にこの時にありと云ふべし、さてその入浴の時に心得べき緊要の事あり、

（一）前掛けのこと

稚子を入浴せしむる時のために、一の大なるフランチルか、若しくは厚き木綿の前掛けを作りおくとは、大に便利ありて、寒中等は殊更ら稚子を入浴せしむるため、衣服を脱がせしとき、直接に風に觸れて風邪せしめざるため、之にて包み、又その上りし時は、之にて拭ふの用に供する也、尤も極寒中には別にフランチルの湯上り拭ひを作りおきて、稚子の入浴中、火にて之を溫めおき、その上りし時、之にて拭ぐふを可とす、

（二）入浴中の時間とその溫度

我が國にては熱つき湯に入るの風習あれど、こは健康のために良からず、殊に皮膚薄弱なる稚子のためには恐るべき害あるなり、稚子のために尤も良き溫度は通常の寒暖計にて九十度を以て最良とし、入浴時間は五六分間を超へざるを可とす、湯より上りたる時は、成

る丈け早く湯を拭ひ去り、柔かき切にて輕ろく四體を摩擦し、その少しく赤くなりたるを度として止むべし、是れその皮膚を厚固にして、風邪等の悪疾を防ぐに第一の良法なり、

（三）虚弱なる稚子の鹽湯

若し稚子の虚弱なるを憂ふる人あらは、その稚子の入浴の時、コップ半杯位ひの鹽を入れて洗ふべし、その壯健を増すと驚くべきものあるなり、

（四）入浴後の乳

稚子を湯より上げて着服せしめたる後は、直ちに乳を與ふべし、兒共は入湯によりては大にその食慾を増すものなり、若し善良に生長せし稚子なれば、それより三四時間は睡眠するものなり、

（五）入浴の定時

人の身躰よりは、絶へず廢泄物の出づるものにして、夜中躰内より出でし廢泄物を翌日までそのまゝにをくときは、身躰の氣孔を壓さぎ、健康に大害あり、かよわき稚子の如きは、殊に毎朝（九時過ぎ）入浴せしむるを怠たるべからず、

調理法

西洋料理とさへ云へば、一概に高價なるものゝ如くに考ふるは間違ひなり、西洋料理にても作り樣にては、日本料理と左程差異あるものにあらず、西洋の諺に曰く、『妻を愛する胸なき夫にても、食物を食らふの胃はあり』と返す〲も調理の法は、主婦の心にをくべきとなれ、

一個のハムチー、四種の効用

玉蜀黍の粒を引き割りたるを英語にてハムチーと云ふ、その調理法は種々あり、

第一はハムチーを取りて、暫らく水に浸しをき、その少しく柔かくなりし時、引き上げてハムチー五勺につき、小匙二杯の割合にて鹽を入れ、更らに煮て食する時は、晝食の野菜となるべし、

第二その食して殘りしものは、少量の砂糖（バタは望によりて入るゝも可なり）牛乳或はクリームを入るれば、夕食に適當なる菜となる、

第三倘ほその殘りたるものは、少量の水にひたし、二個計りの鶏卵と、少しの鹽を加へて煖むれば、翌朝の

菜となり、
第四はその殘りにうどんの粉を混じて燒けば、クリドルケーキと稱する美味なる菓子を製し得べし、

夏向きのスープ

米を通例に煮たるものゝ中に、少量の鹽を混じ、小匙一杯位づゝに丸めて、之に卵の黄味を塗り、その上よりパンの屑を粉にせしものをかけ、油を引きたる鍋にて、こげざる程に燒きて皿に入れをき、上より牛肉の煮汁を灑ぎ、好みによりて少量の胡椒をかくれば、淡白にして夏時に適するスープを得べし、

馬鈴薯のスープ

先づ太やかなる六個計りの馬鈴薯の皮を剝き、一時間計り水に浸すべし、かくて一本の葱を少さく刻み、少さき袋に入れて五勺計りの牛乳の中にて煎じ、先きの馬鈴薯と、適宜の鹽及び胡椒を此の牛乳の中に入れて、二三十分間煮立て、その柔かくなりしを見計らひて、一二個の鷄卵を入れ、膳に供すべし、或る人は鹽の更はりに鹽豕を入れて珍重するもあり、

蕪と牛肉のスチウ

調理せんと欲する牛肉を覆ふ丈けの水を取り、その中へ粉、鹽、バタ、砂糖、胡椒、等を適宜に入れ、之を先なる牛肉に掛けて、火上に置くこと、十四五分、その沸騰せんとするを見計ひて、上に浮びし所の油を除き去り、然る後蕪を一二寸の四角に切り、少しく燒きて色を付け、先なる汁の中に入れて、柔かくなる迄煮るべし、皿に盛るには、先づ蕪を皿の眞中にをき、牛肉はその四方に列べて出すべし、

十月中に爲すべき農事園藝

十月（一日より十日迄）

播種　には小松菜、小麥、加密兒列（藥草種類）春時に至りて食すべき午蒡等此節蒔てよし、小麥は十二月中旬頃迄蒔きつくるも可なり、

移植　には木賊、牡丹、芍藥等とす、

分栽　には、夏葱、款冬、韮、寒菊等にして蘭草は此節より十一月中旬頃迄植付くるも可なり、

茶、山茶、茶梅の實は土に埋め置くべし、

十月（十一日より二十日迄）

播種　は大麥、菘菜、冬菜、芥菜、二年子蘿蔔、水葱、天豆、豌豆、紅花等とす

移植　は柿、桃、漆阿利襪等なり

荏胡麻は少しく黄色を呈したらば採收すべし、否らざれば其種子こぼれ易し、竹藪の古竹は切りて透かし置くべし、櫨の苗は其葉落ち次第

に之を掘り取り暖所へ植へ替ゆべし、

十月（廿一日より三十一日迄）

播種　は三月麥、人參、天師栗等蒔て可なり、大麥は此節蒔くを最上とす、

接木　には葡萄、野木瓜、牡丹等を根接にすべし、

挿木　には桑、葡萄、野木瓜、月花季等にして、十一月中旬迄挿してよし、

松脂は此節より皮に切傷を附けおきさるべし

日用品物價 一二（九月九日）

白米　一圓に付一等九升一合、二等九升三合、三等九升八合、四等一斗〇三合、五等一斗一升

雜穀　一圓に付本貫大麥三斗、新流山靑大豆一斗八升五合、室蘭黑豆一斗六升五合、川越豌豆一斗七升、同新空豆二斗二升五合、古河空豆二斗一升

油　水油一升に付廿三錢、一合に付二錢五厘、石油一升に付十錢、一合に付一錢五厘

鹽　一圓に付赤穗二俵七分、大鹽二俵七分五厘、本齋四俵、新齋四俵九分

砂糖　稀車二十七匁四分、同次二十七匁二分、無類台安十八匁、同次十七匁六分、讃州初雪廿八匁二分、天光二十七匁

鷄卵　千個に付飛切物本〆十四匁廻り十二圓七十錢より十二圓八十錢名目十四匁廻り十二圓二十錢より十二圓三十錢、同く千個に付大玉本〆十二匁廻り十一圓二十錢より十一圓三十錢、名目十二匁廻り十圓八十錢より十一圓、同く千個に付上中九圓八十錢、並中九圓五十錢、並玉千個に付並上八圓五十錢、並下八圓五十錢より八圓

木綿縮　一反に付大幅縞縮三百五十目九十八錢、白縮同一圓五錢

金巾類　の相場は三巾生金巾一圓九十八錢より二圓六十錢、並巾生金巾一圓七十錢より二圓三錢、生金巾一圓四十錢より一圓四十三錢、三巾釜晒二圓四十五錢より二圓七十五錢、並巾釜晒一圓九十錢より二圓二十五錢、晒天竺一圓四十八錢より一圓五十二錢、金巾三ッ割晒二五物三ッ晒十四錢五厘、一圓八物三ッ晒九錢五厘、金巾薄花色二十六錢より三十四錢、紺羽二重二十四錢より三十九錢五厘、新發明舶來退治四十二錢より一圓十五錢、形附卅三錢より五十錢、無垢物取合十七錢五厘より卅一錢、木染風呂敷六十四錢より八十四錢、西京更紗風呂敷十四錢より三十八錢

帶地の相場は西陣織帶地の部、朱珍廣帶四五百匁より一貫二百匁二貫匁迄、風通織丸帶二百五六十匁より三百四五十匁迄、同綿入並に蓬萊織羽衣織百匁より二百五十匁迄、錦立蓬萊廣帶七十五匁より九十五匁迄、糸錦廣帶四百二十匁より一貫五十匁迄、白繻子廣帶二百五十匁前後、黑繻子廣帶百七十匁三百匁六百匁、黑南京丸帶百二三十匁等

雜錄

遺珠類々

愛は潔からざれば深かる能はず　　コント

婦人は婦人らしくてこそ其天職を全ふするものと云ふ可けれ　　グラッドストン

世には敬虔なる婦人の心ほどやさしきものあらず　　ルーテル

若し埃田の園を失はしめし者は婦人ならば之を恢復する者も亦唯婦人のみならむ　　ホイッチアル

余は愛を愛す眞理とても愛より淸きものにはあらじ　　ブラウニング夫人

婦人は弱く母は强し　　ユーゴー

世には妻に優るもの唯一あり其は即ち母なり　　レオボルド、セフオル

鷄鳴に起きざれば日暮に悔あり　楠正成
人の謗を止めんとせば辨する勿れ　王陽明

年齢と男女の健康

我邦に於て男女の數は歐米各國に反し男子の數多くして、大約男百人に女九十七人許の割合なり。而て其百年の道行間も殆ど一定せる如き割合を以て消長し、女子の割合三四歲より漸く高まり、男百人に女九十七八人にて以て十五六歲に至る。而して十七八よりは女子の數次第に減じ三十歲前後にて、九十四五人四十歲前後にて九十二三人となる、是れ其減少の極なり。去れど五十二三歲に至れば忽然九十六七人の割合に復し、五十五六にて男女相平均し、六十歲よりは女子男子を超へて男百人女百二三人の割合となる。これより女子の數非常に高まり、八十七八歲にては殆ど倍し、九十七八歲にては遂に三倍に近くなるなり。顧ふに婦人の健康は生產期に於て最も衰へ、殊に四十前後の生產は最も多く之を死亡せしむるものと知らる。然れども一旦此期を過ぐれば其健康大に增加し、男子よりは一般に長生するもの多きを常とするに似たり。

『何が最もうまかるべき』

家庭は至て無垢なるものなり。如何なる機謀家も如何なる術數家も如何なる邊幅を修飾る人も如何なる智者とか奸雄とか呼ばるゝ人も家庭の溫光に照りては端りなく虛飾の晴れ衣を脫きて天眞爛熳なる姿態となるものなり。去れば家庭にては何人も其持質顯れ、從つて其風儀家內の人々に染みて所謂家風てふもの出で來るなり。此の家風は以て其主公の人となりを知り得べきのみならず、亦以て其家の榮枯盛衰をもあらかじめトするを得べし。

世に傳ふ。德川家康或る時本多大久保平岩など云へる宿將を召し燒火をなしつゝ昔今の合戰を物語り合ひし事あり。話次に一人が凡食物の中にて何が最もうまかるべきかと言ひ出でければ各個其嗜む所を擧げて一決すべくも見へざりける。時にお梶の局とて寵遇淺からぬ女房側らに茶を點じ人々に進めなどしありけるが、諸人のとり〲に言ひ爭ふを聞き打微笑居けるを家康見て『かぢは何を笑ふや若し思ひよりし事あらば道ひ試みよと』言ふ。人々亦『上意なり局が論承はらん』とそゝのかす。局『去らば申して見侍らん。凡そ物のうまきは鹽にこしたるはあらじ、如何程よき調理なりとも鹽なくては味とゝのひ難し。又萬民一日も鹽なくば口腹を養ふ事能はず』と答ふ。諸人手を打て『いかさま』と感じあへりける『家康』さらば天下にまづきものは何ならんと言ふ。こたびは人々『口を開くまでもなし』とて局に讓れば、局謂へらく『世にまづきものも鹽に過たるは候まじ、如何計りうまきものも鹽味過れば食ふに堪へず、皆其本味を失ふなり』と。此の一話にて家康が家庭の如何なりしかを知るを得べし。

若し今にして同樣の問題出ん乎、幾多の女子中指を風月堂の菓子に屈するものはあるべきも、謂ひて鹽に至るものはあるまじ。殊にうまきものと言ふにも之を擧げまづきものと言ふにも之を擧ぐるに至ては、頗る思惑の要る答にして家康其人の言に髣髴たり。局の此言といひ、六十餘州を握りつめたる手にて膝がしらを擲しつゝ君臣燒火を圍む樣といひ、其家風の程をしはかられて渠が三百年の天下は偶然に得しにあらぬことも自から著けし、其家庭の如何に質素に、如何に眞面目に、如何にしめやかに、如何に儉勤に、如何に靜平沈和なりしかは、以て察するに餘りあらん。

同じ頃の英雄なれども之を豊臣秀吉の家庭に比ぶれば著るき相違を見るべし。秀吉の家庭は其性質の如く極めて陽氣に、若き女兒等の笑ひさゞめく聲も高く、かりそめに其臣下を召ぶにも美酒嘉肴をそなへ美人をして其間に周旋らしめ、家康の君臣燒火の邊に澁茶一碗もてくつろぐとは自から同じからざりき。秀吉が芳野醍醐の花の日に假裝舞會を催し、數奇を窮めし茶亭を設け、着飾りぬる婦人を置き、新裝異服して天下の侯伯と其間に周遊りし如き、秀吉が閨の中に五婦人深を樹て寵を鬪はしたるが如き、渠が蓋世の意氣も僅に六十四年にて、覺めて痕なき一場の難波の夢となり果つる事此時に於て顯然たり。彼を思ひ此を思はゞ人々鑑むる所を知るべし。

近時の家庭及婦女青年論

國民之友第百六號は家庭の革命人倫の恨事と題し、家庭の大革命人倫の大恨事たる離婚を論ぜり。本年五月東京市に於て結婚者三分の一は實に離婚者たりし事實を發見して云ふ、結婚は何の爲めぞ離婚せんが爲なりとの言其の詭激なるを以て事實の要を穿ちたるを排すべからざるなりと。而して之を世界の離婚統計に對比して其例なきに驚き、其重なる事情は共諸の離婚にあらずして追放の離婚なるを見、其五原因を擧げたるり。一、婚姻に關する理想の俗惡なる事。二、婚姻の方法不完全なる事。三、舅姑の干渉。四、婦人の人類としての位地を識認せざる事。五、家あるを知りて人として見ず。是に於て渠は離婚の詛に罹りて最も多くの苦痛を感ずるは婦にして男子にあらざるを歎き、之が救濟法を講じて曰く、民法の實施はそれ離婚病を救ふ妙藥にあらざるかと。議論堂々、意義盤々、婦人の爲に泣き社會の爲に長大息せり。家庭に關する近時の大論說と謂ふべし。

女學雜誌第三百廿四號に家庭は一國なりの論あり。謂ふ、吾黨は婦女子諸君に其家庭の研究の面白きことを勸告すべしと。其說に云く、三田の福澤翁前年屢ば人に語りて云ふ、若し吾輩所を能く管理する人あらば政府にすゝめて二百五十圓（大書記官）の官員となさんと。これ實に智者の言なり。一家の經濟を能く料理する人あらば亦た一國の經濟をも能く整のふべし。諸の主婦諸君、諸君は一國の女王にあらずや、諸君が支配する天地の總理大臣にあらずや。家庭の內、諸君が爲すべき新らしき事業漠々として尙廢し尙多し。試みに諸君が心を奮ひ、試みに諸君が手を揮へ、茲に乍ち爽快なる新らしき泉涌かん、其流混々として清鮮、一家の人皆な之を飲みて樂しまん、而して其祝福を與ふるの天使は、主婦たる諸君にはあらずやと。然れども說て如何にして其一國を料理すべきや如何して其總理大臣たる職を盡すべきやに及ばざれば、饗應の席に請せられて飯を食はざる如きの憾あり。

國民新聞第七百九十號は家庭の快樂を說て謂ふ、家庭の一大快樂は老幼少長團欒して食を偕にするより甚きは莫し、是れ最も普通にして最も恒久に最も健全にして最も平易なる快樂なりと。而して邦人の食事は只申譯の爲にするものにして一家の歷史に於ける乾燥無味なる重複に過ぎざるを憾み、泰西諸國に於ては、大ひに趣を異にし、彼等は食物に重きを置き、食事に重きを置き、如何なる急忙の人と雖、其食事には三十分乃至一時間を費すを說き、言ふ例へば宿屋に於ても、我邦に於ては、銘々の部屋にて、別々に食すれども、西洋流にては、皆な一堂に集り會食する也。宿屋に於て猶然り、況や家庭に於てをや。彼等が[illegible]一家の老幼少長を擧て、一堂に集り、或は新聞を讀み、或は面白き[illegible]し、一日に於ける安息時たり、又た祝祭時たり、又た快樂時たるもの、總べて此時間に會萃し來る者、是實に樂望するに堪ゆるものある也。是時に於ては、忙がしげなる主人の顔も、何となく和らぎ來るなり、淋しげなる老祖母の顔も、何となく面白くなり來るなり。心廣く、體胖かに、意恰び、情暢ぶ、以て肉體の健康を養ふべく、以て精神の健康を養ふべし。一盃の牛肉、一碗の珈琲、斯の如くにして飲み、斯の如くにして喫す、其樂如何ぞやと。以て世の一家をして恒に祝福の下に處らんとする者は、渠が案をともにして食する風習をなさしめんとするの希望を無用に附せざるべきを期せり。然り、世の祝福なる家庭を持續せんと欲するものは渠が此言を無用に附せざるべし。

同新聞第八百九號に社會の新結合と題し、中に青年會を論じたるあり。曰ふ。露國大學生が動もすれば露國政府の憂を作す所以のものを察すれば、亦以て青年會が如何に雄大なる力を有するを察すべし。之を個人的にすれば青年ほど微力なるは莫しと雖、之を組織的になし、團体的になす時に於ては、其力を觀するの機到る處に在りと。因て古に於て私盜が青年會の名代をなせるを說き、部落の青年組合が亦然りしを說き、總ての導に於て青年會の勢力が揮はれたるを說き、群馬縣に於ける廢娼運動を引きて之を證し、又社會の停滯不動を發ふ故に人間の中にて最も活力猛氣に富む青年をして特に改革の任に充つと言ひ、終に臨で人或は青年會の本質を曖昧なりと說くと雖、其曖昧なるこそ青年會の本質なり迚、云へり、彼の青年會を要する所以のものは、總ての青年が政治上にあれ宗教上にあれ社交上にあれ學術上にあれ總ての事に於ける彼等の意見を講究し練磨し勸告し發表し實行するの機關とならざるべからずと。

西村茂樹氏　女風頹敗の原因を日本弘道會にて演說して曰く、本邦婦人の柔順忍耐貞節優美は何れも他國婦人の及ばざる所なれ共、其中一種の他國に及ばざる者あり、淫風是なりと。而して王朝に於ては上より風

俗を敗り、德川時代には近松竹田等之を下より敗り、今日に至りては男女同權自由結婚等の洋風之を敗れりとし、其原因を古來妓女を賤まざりし風習に帰し、今日の學校教育を以て女德上に四危險ありと說けり。父母の手元を去りて教師の家に就く一なり。同盟相集りて寢食を共にする二なり。女生徒聚る地に男生徒多き三なり。教育の西洋流なると教科書出版物の淫情を挑發すべきものなると四なり。女德を敗る者を數へて第一劇場、第二俗曲、第三源氏伊勢等の物語、第四和歌、第五小說、第六輸入新聞、第七男女交際の七事を擧げたり。之を要するに復た一種の女大學的の教育を再び實行せんと欲するものか。現時女子教育に對する學者の意向察するに足るべし。

時事一斑

家庭及び婦人年少者用の書物雜誌は次號より續々紹介すべし

家庭雜誌

日本の社會は今や漸く老なんとす、燃ゆるが如き改革の精神は將來論の時代と共に去り、死するが如き回顧の思想は歷史の時代と共に來れり。世界の開化に後れたる日本社會は長足の進步をなさゞるべからざるなり、世界の文明に遺されたる日本人民は異常の生長をなさゞるべからざるなり。異常の生長をなし長足の進步をなす、猶且其異常ならざるを恐れ、其長足ならざるを恐る、何ぞ翅や懷古これなし守舊これ事とする暇あらん。然れども日本社會は改革に倦めり。日本人民は進步に疲れたり。

渠は何を以て疲れたる乎、摸倣的の進步にして自發的の進步にあらざればなり。渠は何を以て倦める乎、理學的の改革にして化學的の改革にあらざればなり。唯摸倣的の進步なり、故に理學的の改革なり。唯理學的の改革なり、故に國家の組織を改革すれば足る、制度文物を改革すれば足る。渠の今日に老んとするも、亦宜ならずや。然れども改革は未だ以て已むべからず。山村水郭の茅屋を見し者は知らん、文明の恩光戶內に入らざるを見し者は知らん、個人の生活が舊面目なるを見し者は知らん、第二改革は將に臻らんとす。理學的改革は國家的になされたり、又貴族的になされたり。然れども化學的改革は當に個人的になされざるべからず、當に平民的になされざるべからず。而して個人的若くは平民的改革は家庭改革にあらずや。『家庭

雜誌』は家庭改革の導火とならんとする者なり。

吾人は婦人が開化の母たるを知る、故に活きたる國民を生むの婦人あらんことを希望す。吾人は嬰兒が新國民の卵たるを知る、故に其花の如く火の如き生長をなさんことを希望す。然れども健全なる人民は健全なる搖籃(家庭)に育せられざるべからざる也、此の新婦人をして此の新人民を育さしめんとせば、第一着に叫破せらるべきは家庭の改革にあらずや。

然らば如何にして之を改革せん乎、如何にして新婦人を助けん乎、如何にして新人民を育さしめん乎、抑々如何にして光明あり和樂あり清福あり健康ある新家庭を作らしめん乎、是れ吾人がまさに號を逐ふて讀者と共に講究せんと欲するの所。

古人云ふ、德不レ孤必有レ隣と。吾人は天下に吾人と志を同ふする者の必す寡からざらんことを信じ、こゝに『家庭雜誌』を霸して、第二改革の途に上る。

※　※　※　※　※　※

秋風不二相待一

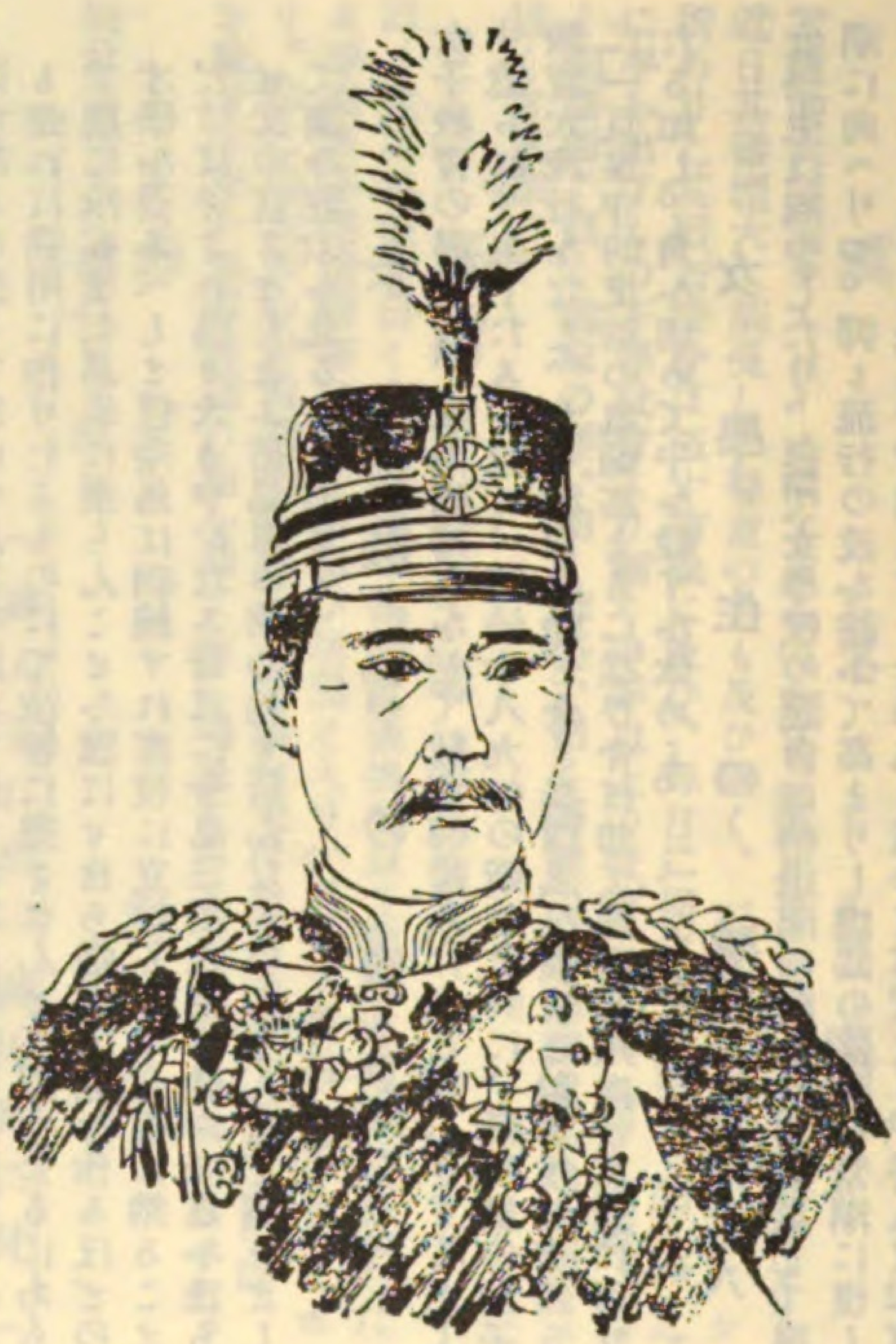
夏季休業を以て歸りたる男女學生は、巳に其父母に別れ其兄妹に別れて再び都下に聚まれり。願ふに秋風相待たず先づ洛陽城に至りしを感ぜしもの亦少なからざるべし。地上の秋に逢ふは、是非なし。人生の秋に逢はゝ、悔將に至らんとす。

婦人新聞記者ウエスト女史の來遊

米國ユニオンシグナル雜誌の主筆にして、イリノイ婦人禁酒會長なるウエスト女史は、去月卅一日イムプレスジヤパン號に投じてバンクーバーを出帆ありたれば十三四日の頃には我が國へ來着あるべし、女史はイリノイ州に生まれ、十七歳にして大學を卒業し、九年の間ノックス校の校長に任じ、教育社會にありて勢力を有すること、實に廿九年の長日月間なり、女史は甞て『小兒とその注意及び開育法』なる一書を著して、大に家庭教育の必要を喚起し、又婦人出版物協會の會長として大に盡す所ありき、この度六ケ月の休暇を得たれば、各國を遊歷する途から、日本へも立ち寄り、禁酒矯風事業のために大に盡す所あらんとす、それにつき東京にある禁酒會、婦人禁酒會、白標苦樂部、及び有志者は各々聯合して、東京婦人矯風會を推して主任となし、それ〳〵歡迎の準備せり、又全聯合會より『ウエス孃の傳及び禁酒演説』なる冊子を販賣し、大に禁酒事業のため氣焔を吐かんとて、既に冊子は各會にて販賣中なりと云ふ、

東大陸を横截する旅客

匹馬驅り去て四千里の雲を踏み破らんとす、福島少佐亦豪膽なりと謂ふべし。少佐は信州松本の人、我が伯林公使館附の武官なり、年正に三十前後。本年二月一挺の短銃と一領の肌着とを携へて單騎普都伯林を發し、露都に入りて露帝の延見を受け、モスコー府にて萬衆に歡呼せられ、今やかの寒風凜冽たる柴伯里内地を横ぎらんとして實に遠征



の途上にあり。頃者其オムスク府に達したる報を傳ふ。少佐が此行は終始騎馬を以て旅行せんとする者にて恰も是れ關雲長其人ならざるも亦千里獨行の客、平沙漠々人煙絶へたるの地を渡る。其壯行想ふべきなり。吾人は其齎らし歸る幾多の新聞を報道する日あらんことを、讀者と共に待たざるを得ず。

天を摩するの大木を箱庭の中に作る

國家教育の弊一に何ぞ高き。壓制の害は教育壓制の害より害なるはなさなり、今の普通教育（或る部分）は害なる哉。思慮あり撰擇あり反抗力ある成人を壓制す、壓制は猶卵なり。況や無我無意なる少男女を驅て悉く之を偏屈固陋なる國家的摸型中に投ぜんとするをや。猶以て自由あり活力あり天眞の美質爛熳として發暢せる花の如く火の如き新人民を望まんとするか。抑光明あり希望ある昇日の如き新國家を望まんとするか。此の如きの爲す所を以て此の如きの成る所を望む、恰も天を摩するの大木を箱庭の中に作らんとする如し。

殺兒、殺人、

家庭教育の過誤は精神的殺兒者を生ずべし。學校教育の過誤は精神的殺人者を生ずべし。上帝の目は精神的殺人を見ること血肉的殺人を見るに異らざらん、世の父兄たり教師たる者、細心せよ留意せよ、誤て殺人者となる勿れ。誤て殺兒者となる勿れ。

讀者の答を待つ

人を殺すものは死す、是れ普通の場合に於て天下に適用せらるゝ法律なり。然れども精神的殺人は功勞なるか、精神的殺國家は勳業なるか、吾人は我が讀者の答を待つものなり。

松方伯爵の家庭敎育

さて頃者讀賣新聞に左の如き記事あり。吾人は其眞僞と可否とを知らずと雖、こゝに掲げて世の父兄の參照に供す。

前の總理大臣松方伯爵の家庭に於て子女を教育することは極めて謹嚴にして苟且にも愛に溺れて之を忽諸にすることなし伯は十三人の子寶に九人まで男子なるが常に其子を教育するに當りては露ほども驕りがましきことなし現に七八歳より十四五歳になる男子四五人あれど寒中と雖ども足袋を用ゐしめず衣服は粗末なる木綿にしてお附の者など云ふものは一人もなく常に邸内にある長屋の中に書生と共に同宿せしめ本宅の座敷にて食事するなどの事は決してなし又書生等に命じて同等の交際をなさしめ主人の子なれば之を大事にするなどいふこともなく

蒲團の上下しより飯の給仕迄自ら其勞を取て人手を使はしめず只七八才の小兒にては高き戸棚より夜具を下すこと能はざれば此の一事に限りて他人の手を假らしむ、夜も何時に寢て朝何時に起き學校へ行く前には何々の課業を爲し歸宅の後は何々の勉强を爲すといふことまでも嚴重に取定めて霜結び氷張り詰むる冬の朝と雖も湯にて顏を洗はず自ら井戸流しに行きて盥嗽せしめ假令遠き處へ行くことあるも馬車又は車に乘るを許さず常に令息等を誡めて曰く我家に數輛の馬車はあれども是れは我用に作りたるものにて汝等に樂させんとて拵へたるにあらず故に汝等また馬車に乘らんことを願はゞ自ら進んで之を作るほどの才學を養ふべしと但乘馬は訓練すれば役に立つものゆへ馬に乘ることだけは許され偶々大きやかなる荷車に令息三四人乘り合ふて馬を走らせ父の召させたまふ箱馬車の乘心地も斯んなものならんなど嬉々として樂み遊ぶを見ることありと

女子敎育の傾向

女子教育の必要は、家内的婦人をして社會的婦人たらしめんとする上より迫られて生じたるを以て、明治十八九年の新政と共に、泰西風の女子教育大流行をなし、女子教育は殆ど全く泰西風を模する勢なりし。然るに一旦保守的反動の氣焔高まるに從ひ今は却て國粹的傾向の其極に至りたる如し。角を矯めて牛を殺すを休めよ。

女學生の減少

女學生は減少したり、從て女學校の運命は稍退潮に向へり。其果して退潮に向へりや。抑ゝ流行の波を趁ふて高まりし虛僞の盛運が常潮に復したるによるやは知らず。然れども女學生の減少は事實なり。吾人は率直に其事實を報せずんばあらず。

小新聞改革

婦人は一般に多感なり、又一般に多情なり。泣き易く笑ひ易く心を動かし易きを常とす。是れ婦人の婦人たるに恰當せる資格なるべし。それ然り、故に婦人は其見る所のもの聞く所のもの常に高潔優麗なるを欲せずんばあらず。然るに今や所謂小新聞なるものに由て社會の音信は渠等に通ぜらるゝも、其記事大半は男女の野合にあらずんば夫妻の喧嘩なり。藝妓俳優の醜話にあらずんば人殺し盜賊の報知なり。かれ小新聞が以て鑑戒を垂るとなすもの正に以て其私行を薬るに足る。吾人は家庭改革の第一着として小新聞改革の必要を感ず。

猶俳優落語家を假らざるべからざるか

試に一二新聞紙を繙し看よ、（本月初より九日までの所見）

○水害義捐演藝番組　今三日より五日まで三日間午後一時より神田錦町錦輝館にて催す水害義捐演藝會の番組は滑稽落語（三遊亭圓左）富士松淨瑠璃（立花屋花子）西洋人情話（英人ブラック）義太夫淨瑠璃（竹本住之助、同小住）奴の小まん（松林伯知）清本淨瑠璃（清元お葉、梅吉）寛永年間洪水の話（三遊亭圓朝）水害實況大幻燈（中島待乳）等にて入場料は優待券五十錢、特別券廿五錢、通常十錢なりと

○慈善演藝番組　明四日正午十二時より蠣殼町友樂館にて催す慈善演藝の番組はおよぎの醫者（三遊亭圓左）滑稽新話（土橋亭りう馬）曲引（都々一扇歌）義士引揚げ立讀、汐止橋（放牛舍桃林）同上、伊達家門前（伊東燕尾）同上泉岳寺（桃川如燕）佐倉義民傳（春錦亭柳櫻）岸姫松三段目（竹本織太夫、鶴澤文造）等なり

○育兒院慈善演藝　來る十、十一、十二の三日間午前十時より蠣殼町の友樂館に於て催す福田會育兒院慈善演藝會の番組は滑稽新話（圓遊）昔話（圓喬）雪中梅（伯知）初日四季三番叟二日目吉原雀三日目廓文庫（清元連中）初日一の谷陣屋の段、布引の瀧琵琶の段二日目盛衰記逆櫓の段、伊賀越沼津の段三日目お染久松野崎村の段、近江源氏佐々木隱家の段、（和合連）攝州生駒山だんまりの場金剛次郎（しげ松）袈裟太郎（小竹）與女中菊江（小きく）菊若丸（三勝）下部要平（ひな助）保名物狂安部保名（小きく）蝶子清元連中、色競戀の緋當仲の町の場、露の繁松、金棒曳（しげ松）茶屋女お竹、金棒引（小竹）名古屋山三（ひな助）不破伴左（三かつ）四季の山姥足柄山の場、山樵（ひな助）怪童丸（すゞ子）山姥（小綠）にて場代は階上三十錢階下二十錢づゝなり

此の如き記事は日々に見月々に見るなり。吾人は無下に落語家講釋師淨瑠璃語り俳優乃至藝妓を賤む者にはあらず、人類としては同く之を日本の同胞と見るなり。技藝家としては亦之を一種の技藝家と見るなり。故に此等の人々が慈善會に演藝するを非とせざるなり。唯悲む、慈善事業を其天職の一として生れたる婦人にして、此等專門者の手を假らざれば、以て其慈善會を開く能はざるか。

非日本人十字軍

非日本人十字軍は米國に起らんとす。日本人民は北米自由の鄕より驅逐せられんとす。此れ頃日新聞紙の傳ふる所、其眞僞未だ知るべからざる

ものなり。吾人は其虚報ならんことを祈り、虚報ならんとを信せんと欲す。然れども好し虚報にもせよ此の如き虚報を傳へらるゝは日本人民の名譽にあらず、

一 異 報

新聞紙一異報を傳ふるあり。曰ふ朝野の貴顯及び貴衆兩院議員中の有力家十數名發起者となり、かの西班牙政府の保護の下に立つマニラ富の方法に倣ひ、公然たる官許の大富籤を興行せんと企つるものありと。世人以て奈何となす。

嘆 又 嘆

富籤的大博奕チーパーと稱するものあり、猾智なる支那人其大親方なり。近日其毒煙大に瀰蔓し、警吏の力も及び難く、一昨年末府下に四十八ヶ所ありし其發行所今は五十有餘に及び、毎日二回之を開張すと聞く。之に手を出すもの下等社會より漸く中等以上の社會に及び、曰く紳商、曰く相場師、曰く商家の妻、曰く俳優、曰く藝妓、曰く落語家其他の藝人、曰く官吏等、

寄席は再ひ繁昌せんとす

曰く震災義捐。曰く水災義捐。義捐又義捐を以て繁昌の端緒を惹起したる淨瑠璃落語講釋等は、今や再び暑熱と入りかはりて繁昌を來さんとせり。殊に義太夫の勢滔然他を壓し、女義太夫は常に三勝半七酒屋の段、お駒才三鈴か森等淫靡の曲を語て大に喝采せらる。社會の好尚知るへし。

悲むへき現象

統計は吾人に語れり。曰く、

	罪人百人に付悔悟者	罪人百人に付不悔悟者
未婚者	四九、三六人	五〇、六四人
無配偶者〜子ナキ者	五四、一五	四五、八五
無配偶者〜子アル者	五四、六五	四五、三五
有配偶者〜子ナキ者	五八、二〇	四一、八〇
有配偶者〜子アル者	六一、六〇	三八、四〇

是れ最も注意すへき事なり。百人の罪人中悔悟して善に遷りしもの、未婚者は四十九人三分六厘のみなれども。有配偶子あるものは六十一人六分あるなり。又悔悟せざるものは全く之に反し、未婚者五十人六分四厘にて有配偶子あるものは三十八人四分の割合とす。然らは配偶はよく人を罪惡の淵より救ふものと見るも不可なからん。

故に之を他の方面より見れば、或る場合に於て不婚は罪惡の本となるなり。古に稱す、恒産なきものは恒心なしと。啻に恒産なき者然るのみならず、配偶なきもの亦然り。而してこの配偶なき者は明治二十二年に於て實に二千五百十八萬千七百八十二人あり。之を同時の有配偶者千四百八十九萬〇二百三十八人に比するに殆ど倍せるなり。加之、配偶者は

	明治廿二年	同廿一年	同二十年	同十九年
人員千ニ付配偶	一八五、〇〇人	一八七、三四人	一八八、〇四人	一八九、二九人

此の如く年を追ふて次第に減じ行く如し。唯之に反して漸く増加し行く者は一の私生兒あるのみ。

	明治廿二年	同廿一年	同二十年	同十九年
公生百ニ付私生	六、〇〇人	五、七五人	四、九四人	四、〇四人

是れ豈生活の困難が配偶を抑止して、却て姦通を奨勵するに由るにあらずや。アヽ悲しむべき現象と謂ふべし。

起きよ、覺めよ、

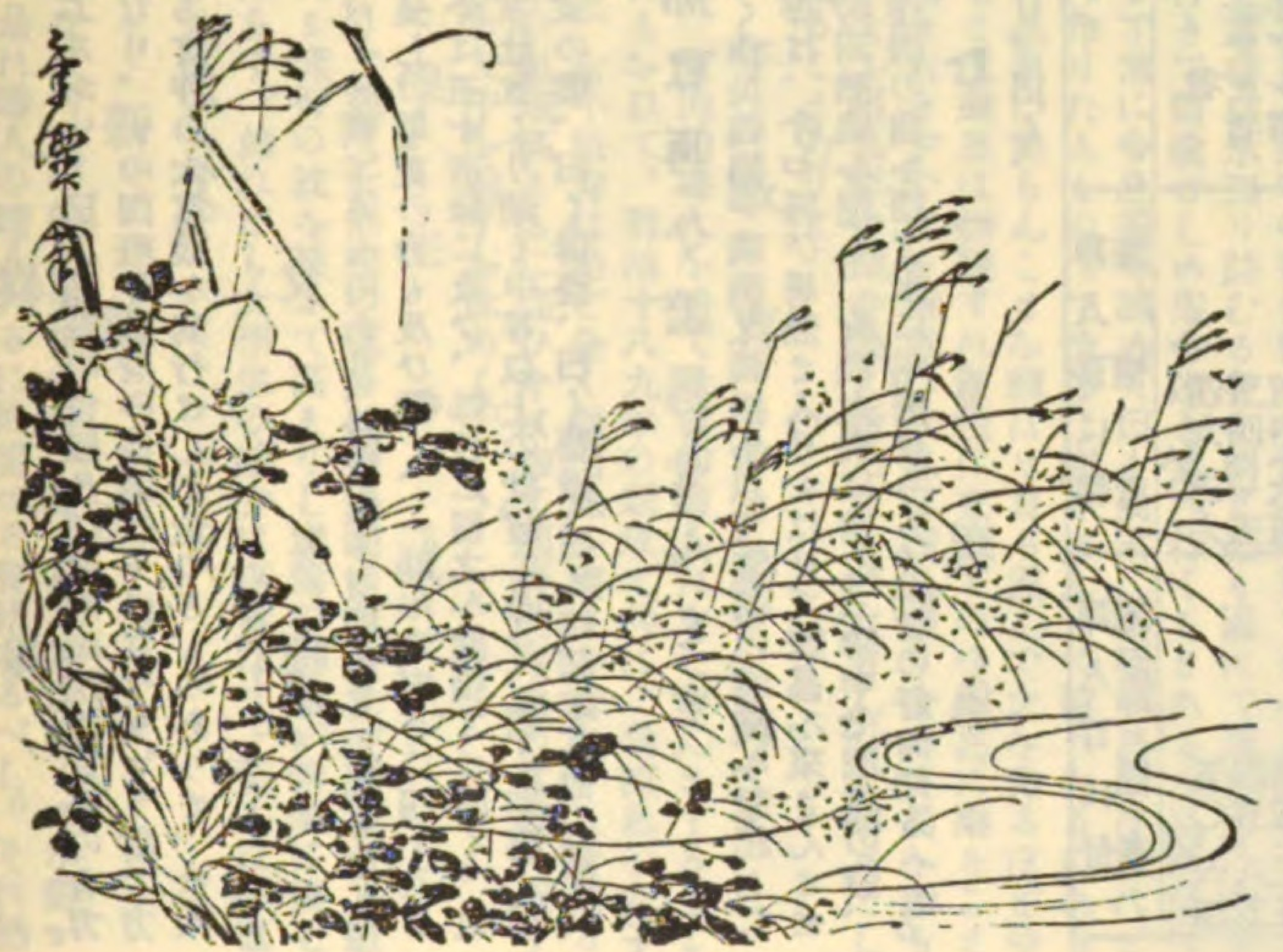
眠れるか、死せるか、抑々暑中休暇をなせるか、何ぞ婦人會婦人運動の寂として聞ゆるなきの甚しき。起きよ、覺めよ、改革の業は未だ休すべからざるなり。婦人のなすべき事は未だ少なからざるなり。

行樂(あそび)

行樂は人生(ひと)の一義務(つとめ)なり。社會は此義務あるが故に無味ならぬなり。皇天多仁、人に勞働(はたらき)の辛き義務を負はすると共に行樂の甘き義務をも負すなり。宜しく勞働くべし。宜しく行樂(あそ)ぶべし。行樂ぶべきに行樂ばず、勞働くべきに勞働かぬは、自家(おの)が力を偷む者と、天物を暴殄(すつ)る者となり。自家が力を偷まざらんと欲せば勞働くべきに勞

働くに如くは莫し、天物を暴殄ざらんと欲せば行樂ぶべきに行樂ふに如くは莫し。而して如何に行樂び來り、行樂び去るとも、行樂は勞働を買はんが爲の準備なることを忘るべからず。

請ふ先づ都下の兄弟姉妹の爲に『九月』の行樂を案内せん、萩の花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花、また藤袴、朝顏の花、千々に咲き亂れたる七草の秋色を看んと思はゞ、去て向島の百花園に至るをよしとす、新晴一路墨田の濱、待乳山を左天に晲んで斜照涼しき川風に衣を吹かせつゝ、新郎新婦相携へて行かば、渠等が秋は如何に美はしき親愛の露に濡つらん、渠等が家庭の清福は爲に少なからぬ光明を添ふべし、然れども城西の人にして向島を遠しとせば、近く廣尾の笑花園を訪ふも可なり。秋光到る處皆賞するに堪ゆ。然らざれば鐵道馬車に取り乘り兩國に至り、腕車更に東に驅て龜戶村の萩寺を觀るも興あり、うねりくねりし萩の花葉、朝風に貫きとめぬ珠を散らし、耻ぢらふかと見ゆるときやかなる清き色のほの紅に匂ふも床しからずや。



蟲を聽かんと思ふ者は、城北の道灌山に遊べ。而して日暮里に往け。未た必ずしも淸夜俯仰の感慨なくんばあらず。

向島、廣尾、亦秋聲。

若しかの兒女を拉れゆく人は、寧ろ晴を趁ふて上野公園を漫歩きし、或は淺草愛宕に至るも不可なし。上野に遊びては兒女の爲に彰義隊の墓下に昔譚りし、黑門に銃丸の痕を數へ、東照宮に古英雄を話し、グラント檜に偉將軍を譚り、動物園に寵兒の笑ふを見、博物館の愛女の可愛ゆき驚きを見るも少なからぬ利益あるべし。又、凌雲閣愛宕塔に上りて方四里の都を眸に收め、往く舟、來る帆、雲間に見ゆる房總の山、視線を遮る幾多の大建築物、低く飛ぶ鳥、高く懸る雲等を指點して說くも面白かるべし。

博物館（上野公園地）

觀覽券　日曜日 五錢／火水木金土曜日 三錢／右五歲以上十歲未滿者は半額

休日　月曜日

動物園（上野公園地）

觀覽券　平日二錢、仝小兒一錢五厘／土曜日一錢五厘、仝小兒一錢

休日　月曜日

東京敎育博物館（神田宮本町舊聖堂）

通常觀覽券　二錢

休日　月水金曜日

帝國大學植物園（小石川久堅町）

觀覽券　平日 二錢／日曜日 三錢／右十年未滿半額、五年未滿無料

開園　每日午前八時より午后四時半まで

遊就館（九段坂上靖國神社內）

觀覽券金三錢、五年以上十年未滿は金一錢

開館　日曜日、水曜日

鮎漁を好まんか玉川に往け、最も近き二子村は青山のさきにて三里許に過ぎず。然らざれば熊谷に赴け、漁獲最も多かるべし、道は上野より北滊車に駕りて幾長短亭を走るなり。蓬場邊より大橋近くまでの彪魚(かいず)こち。永代橋邊のせいご。法恩寺堀筋、東永代町河岸、中川筋西舟堀材木屋河岸等のはぜ。赤絲を引けばかの潑剌も上るべし、是れ男兒の好娛樂。月を觀んには高輪可なり、月の岬の月淸し。品川沖の海上の月可なり。愛宕山、九段坂、不忍池畔、神田明神、湯島天神、待乳山、綾瀨川、隅田川、中洲等皆可なり。其昔草より出で、草に入りし影の今は屋根を出で、屋根に入るを見るべし。廿一日は河崎の大師なり。臨時滊車新橋を發すべし、雜沓重れて雜沓。

寄書

社會事情一斑　有、無、

其一　近時の文學界

明治十九年(十八年末より)は近頃の思想史中最も記臆すべき年なり。政治界に於ては伊藤伯新內閣を組織して政制變革に從事し、井上伯非常なる熱心を以て條約を改正せんとし、こゝに於て大なる歐洲主義の輸入を促したり。而してこの催促に應じて大に入り來りたるもの二、一は貴族的文明の風習なり。一は平民的文明の理想なり。貴族的文明の風習は井上伯伊藤伯等の手より、其新政の花として政略的に輸入せらる。是に於て踏舞の大流行を來し、宴會の大流行を來し、女論の大流行を來し、女子教育の大流行を來し、東髮の大流行を來し、洋裝の大流行を來し、改良會の大流行を來せり。然れども渠は其形態を輸入して、形態に先て其精神を輸入することを忘れたるが爲に、渠の新政は終に失敗を以て其局を結へり。之が紀念として留めたるものは、奢侈と醜陋との瘢痕のみ。平民的理想は最も意外なる地より輸入せられ、文學の上より發表せられたり。『將來の日本』著者はたしかに之が發表者の一人なるべし。

『將來の日本』一たび顯れ、『新日本靑年』一たび顯れ、『國民之友』一たび顯れてより、世上の著書論說に如何に多く新の字を用ひられ、如何に多く未來將來の字の用ひられ、從來何々雜誌何々論何々說と云へる如き露骨なる標題がこれより如何に多く形容辭を添へて用ひられたるかを見ば其思想界殊に文學上に如何なる革新を加へたるかは之を知るに難からざらん。然れども渠が意見の世に誤解せられ誤用せられたるもの亦少からざる如し。渠が平民的進步說は多少井上伯の貴族的進步政策を間接に補助せし結果を生ぜり。渠が平民的靑年論は新政反抗の氣運と共に幾分か世の所謂壯士を作れり。故に渠の論は其初めや最も多く壯士及び書生に讀まれき。然れども渠は終に壯士と相背けり、貴族的進步と相反けり。而して渠が其所說を發表する利器として新生面を開きたる文學は要するに其議論に感情的辭句を用ひたること是なり。是より先き幾多の議論は皆乾枯露骨の文字を以て行はれたりしが、渠に至て漢文學の文字を以て歐文學の形態に作り、感情的に其議論をなせり。是れ其時人に歡迎せられたる所以。

之と同時代に同く新志氣を煽ぐ團扇となり、兼て小說流行の氣運を燃すふいごとなりし者の一に、『經國美談』ありき。又新史潮を涌かし大學には古典講究科の設さへある間に『開國始末』の著もありき。所謂改良會なる者の雨の如く勃興せしは、實にこの前後にして亦歐化政策の影響によらずんばあらず。『かなの會』は起れり。『羅馬字會』は起れり。『哲學』も流行せり。宗教も活勢あり。改良又改良、改良の勢威人種改良說に至て極まりぬ。

此の新政繁昌の餘勢はまた政治小說の流行を惹き起せり。第一に愛讀せられしは翻譯小說にして、ジスレリーの政治小說之が魁首たりき。又リットンの誤譯多き翻譯もありき。然れども翻譯小說は舞臺我にあらざるを以て未だ全く世人を滿足せしむる能はず、是に於て『雪中梅』『佳人の奇遇』等出でたり。皆政治小說にして立憲政治を希望するもの若くは時の壓制を憤る者なりき。此等は固より拙き者なりしが大に時勢に投じたるを以て、亦下に讀まれぬ。要するに此間は希望の時代にして、其說く所は將來未來靑年新世界新天地等にありて、文學に於ても、政治に於て、其叫ぶ聲は等しく『未來』と響き、其應ずる聲は『二十三』年と鳴りき。

然るに貴族的進步政策は條約改正の中止保安條例の發布等と共に漸く零落の運に向ひ、歐洲主義反動の念漸く盛に、二十一年四月を以て國粹保存と稱する新保守派『日本人』なる雜誌に由て社會に其開店を廣告せり。感情的文字を以て日本的理想を吐くの論客志賀矧川出づ。此の新保守派なる者は平民的進步主義に反對すると共に、又最も貴族的進步主義に反對せる者なりしを以て、其舉措は平民的傾向を有し、其理想は王室を國粹の首とする貴族的のものなりき。貴族的進步政策の失敗と共に、國粹論の興ると共に、併日本の小說讀ま

れ、尋で新作の人情小說出るに至りぬ。

當時の新人情小說に二派あり、一は歐化主義を執り、一は國粹主義を執れり。歐化主義の一派にして「假名の會」「羅馬字會」等より思ひ付きしは言文一致派なり。是れ專ら其形態を歐化主義になせるものなり。山田美妙は此派の流行り子にして、別に一種の色を帶びたる長谷川二葉亭矢崎さがの屋、此派に於て亦其高潔なる理想を吐けり。『都の花』はもさ此派の機關の如くなりき。而して國粹保存的人情小說派は所謂硯友社なり、『我樂多文庫』を機關さす。此等の軟性文學はこれより、他の硬性文學さ共に、一時進步派保守派亂闘せり。

言文一致派の小說は明治廿二年の上半期を最盛の時代さす。而して所謂折衷派の小說も當時漸く昇天の勢をなし、『新著百種』の如き小說冊子亦顯れ、花を以て理想の標章さする『都の花』の外に、紅葉を以て理想の標章さする『我樂多文庫』の外に、竹の如き翠葉を以て理想の標章さなす『新小說』も出でき。森田思軒饗庭篁村須藤南翠は其主唱者なり。

明治廿二年の憲法發布は實に希望文學さ回顧文學さの過渡にして、硬性に於てゝ軟性に於ても然りしなり。而してこれより硬性文學は衰へたるにあらざれども、軟性文學の盛に氣をされて人の注目を惹くなりき。かの希望的政治小說を以て成功せし須藤南翠は『綠蓑談』『新粧の佳人』等を殘してこれより漸く衰へぬ。一時文體の新奇なるに由て買ひかぶられし山田美妙も二十二年の秋風さ共に、漸く其文體に飽かれぬ。因て其穠華なる文字に反對して、輕妙文字を弄する饗庭篁村持囃され、又纖弱なる體に反對して幸田露伴顯れ、『むら竹』出で、『風流佛』出でき。是等は皆日本的のものにして、篁村は自笑其磧に自得し、露伴は『法華經』を三唱して西鶴及び葛藕本のあるもの天竺浪人の痛罵等を加味したり。

この頃又小說批評家さして内田不知庵石橋忍月等ありしが、今や一は官に鞅掌し、一は翻譯に從事してまた餘念あらず。

而して所謂新詩體なるものも亦この頃より漸く流行の徵ありき。然れども今未だ發暢を見るに至らず。

此年の上半期前年の下半期頃より、文學は殆ど直接に政治さ消長を關せずなりぬ。

廿三年に入りて森鷗外『舞姬』の作あり。鷗外は後に『しがらみ草紙』を出して大に文學論の氣運を興せり。而てこの頃より新作小說稍衰へき。

此年より廿四年にかけ文學界に著しき現象は、古書の搜索是なり。而してやゝ先つて最も驚くべき西鶴の世に持囃されし事あり。西鶴を屑紙の中より拾ひあげしは淡島寒月なり。而して最も之を愛誦せしは尾崎紅葉なり。紅葉は清瘦婉約なる文字を以て巧に市井女兒の態を描き、最もよく其痴情を寫せり。當時露伴の嬌傲なる男兒を寫すに對比して一時の異觀さ稱せり。渠は美妙の如く一時に聲譽を博せざりしを以て、亦久く其名を保ちぬ。

古書の搜索は新保守的反動を機さし、西鶴の索し出されたるを見て、搜し始められき。（其以前に馬琴の搜し出されたるありしさはいへ）西鶴さ共に索されしは元祿文學なり。芭蕉も出て、近松も出て、自笑其磧等も出でぬ。已にして更に遡りて王朝文學を索するものあり、『源氏物語』『枕草紙』等より以て德川時代の國文學に及び、『日本文學全書』『百家說林』『日本歌學全書』『百萬塔』其他の叢書大に翻刻せられ、延て明治二十四年に及べり。今猶全く其跡を絶つに至らず。遂に半は解釋文學にして半は時文評論なる『早稻田文學』出るに至りぬ。

『早稻田文學』は坪内逍遙の主さして編述するものに係る。

坪内逍遙は日本の文學界に於て最も記臆せらるべき一人なり。渠は小說が士君子の前に出すべきものにあらずさして叱斥せられたる時に於て、小說の改良を唱へり。『小說神髓』は其意見を吐きしものなり。當時渠の眼は日本小說中に唯馬琴あるを見しこさ依田學海に異らざる如し。渠は遂に『核澈奇談』の翻譯より文學界に門出し、或は書生を嘲り、或は二十三年を豫想し、又幾多の好小說家を作れり。渠は今やシエクスピーアの解釋に餘念なく、近松の解剖に餘念なし。

而して戲曲に於ては曩に依田學海ありて新脚本を作り、今や福地櫻痴ありて新作し若くは改作を事さす。櫻痴居士は志を政治界に失して文學者さなり、曾て『もしや草紙』を作て世を嘲りしが、今は『幕府衰亡論』の作を以て世人に忘られず。

廿四年より今年初にかけては古文搜索の餘火漢詩に移り、漢文學に移りて之を燃せり。中に森槐南の漢詩添作批評支那小說の解釋に於ける若くは其用字の妙に於る如きあり、又國分青厓野口寧齋等の人々もあり。

之を要するに新作小說の時代は已に去りて、歷史傳記の時代來りぬ。曾て希望の時代なりし社會が、明治二十三年の國會開設に其希望の大部分を徒消せしより、一層回顧の運に向ひ、社會は停滯し、跼蹐し、資料を之に取る文學も同く停滯し跼蹐せり。故に渠等作者は連りに回顧して歷史傳記の時代さなし人物評論の時代さなしにき。

歷史の已に幾分を世に公にしたるは『日本文學史』『新日本史』の類一二なり。『日本文學史』の著者一流は考證頗る力むさ雖、爛々炬の如く裡面見活勢を達觀するの眼識なし。又辭句を飛動せしむるの活筆なし。『新日本』史の著者は新聞記者たるだけありて、能く山中に在て山の形勢を見、慧眼常に大勢の根本を射り、其筆鋒舞ふが如し。唯奈何せん渠は身社會の活勢さ共に走るを以て、精該なる考證をなすの暇あらず。蓋し渠は新聞を書く如くに歷史を書けるならん。

而して人物批評に於ては。德富蘇峰の政治家に於ける、三宅雪嶺の學者に於ける、植村謙堂の道德家に於ける如きあり。皆現時の撰なり。蘇峰は堂々、大家の風あり、其絢爛の筆は漸く雄健さ變りぬ。雪嶺は健勁、正言し硬辭す、渠は深酷にあらざれども假借する所なし。謙堂はこれ秀徹、亦一種莊矜の姿あり。

因てトするに硬文學は漸く其勢を挽回すべし。歷史傳記は猶幾何か作らるべし。日本人物論は已に始まりぬ。支那人物論も亦始まらんさす。小說の如きも、幾何時をか經て更に新奇雄大なるもの出て來らん。之を一言すれば文學界の『今』は唯『待つある』の時代のみ。

家庭雜誌第貳號

（明治二十五年十月十五日發兌）

社　説

家庭に於ける手工

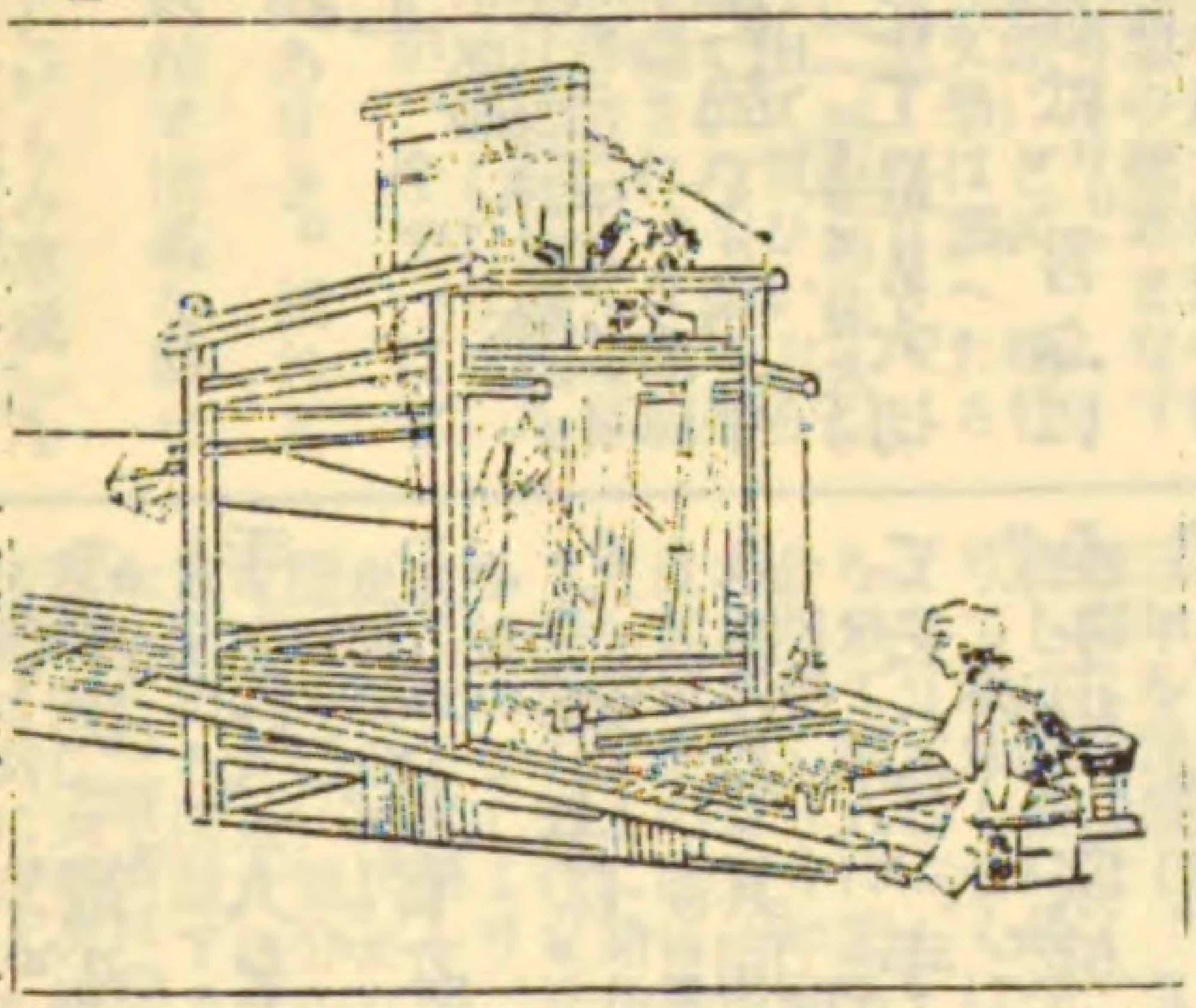
衣食の爲に手工を作すは、言ふ迄もなし。手工を作して衣食の爲に稼ぐの必要なき富裕の家庭に於ても、手工の事は、努め怠る可からず。手工の中にて最も大切なる者は、養蠶、裁縫、機織。割烹の如きは、言ふにも及ばず。

家内のうちに、時ならぬ浪風を起すは、家内の人、無事に苦めばなり。其子女の動もすれば、不取締に赴くは、仕事なければなり。或は種々の悪風、家庭に流行し、或は不愉快の空氣滿ち、或は其心の平和を破り、或は其肉躰の健康を傷ふもの、其原因多しと雖、遊惰なるより來らざるもの少し。遊惰は時の盜人と云へり、時の盜人のみならず、實に家庭間幸福の盜人也。之を除るには、是非勉强の家風を作らざる可からず。勉强の中にて最も著るしきは、手工なり。

手工は、人をして規則立つ者とならしむ。手工は、人をして着實ならしむ。手工は、人をして正しくならしむ。手工は、人をして邪なる念を去らしむ。手工は、人をして其同胞に向て同感の情を深からしむ。一言にて云へば、手工は、人をして其心にも其身躰にも、健全を得、家庭をして平和幸福の天地とならしむ。

唯一の養蠶なり、其發生より繭となる迄には、一定の順序あり。蠶兒を飼はんとする時には、己が心の自由に任せず、自から其規則を踐まざる可からず。眠ければとて、中夜燭を秉りて蠶兒に桑の葉を與ふるとを選る可からず、機織の如きも、其一縷一絲、相層りて一

尺となり、一匹となり、是を作す時に於ては、忍耐の功をも積まざる可からず、胡麻化しをも爲す可からず。凡べて手工は、物を欺くと無く、內、己れを欺くと無く、所謂、己が眞心を手の先に行ふ者なり。是を作す時に於ては、其心自から正しくなるは、自然の理なり。又た是を作す間は、一心一向、之れに心向ひ居れば、不善なる考の入り來る筈なし。而かも其仕事に就くときに於ては、之を成し、之を遂るには、一定の道筋ありて、決して無暗に出來上る者に非ざれば、其心自から着實になるは、當り前なり、況や婦人には、躰操など、別に大層なる事を爲さゞるも、或は屋敷の外に出で、桑の葉を摘み、或は家の裡に於て機織を作すときに於ては、自から其身躰の健全になるは、言ふ迄もなし。所謂、勞作は神聖なる者なりとは、洵に金言と云ふ可し。



文明の世になれば、分業盛に行はれ、織物には、呉服屋あり、裁縫には、仕立屋あり、割烹には、料理屋あり、富さへあれば、何事も手を動かさずして出で來る便利の世の中なれば、或は、如何にして己が身に纒ふ綾羅の出で來るかを知らず、中には、桑の葉も見ず、蚕も知らず、縱し之を知るも、纔かに繪本にて知り得たるが如き者もあるべし。然れども若し、自ら是等の事を作し、如何に一の繭を造り、繭より糸を造り、糸より織物となり、織物より衣服となる迄に、人の手數を掛けたるかを思へば、何となく佗に向て同感の情を深くし、己が傲り高ぶる心も、自から和らぎ、謙遜にして愛憐ふかく、而かも勉強にして怠らざる人となるを得べし。殊に文明流の學問を爲したる青年の子女、及び縉紳豪富の婦人等の如きは、手工に心を用ゆるは、眞に大切

一筆示しらせ候陳ば妾こと如何なる因果にや色黒に生れつきいまいて女子は色白ければ七難をかくすとのたとへにまことにく口惜しくおぼえいまゝこゝろのくすりかしこの秘術まじないとためしいへ共いつかなきゝめなく心細くうらがなしく思ひい折節御社の新聞にて日新館にてうり出す野上さん御發明の色白くなるくすりの廣告拝見いたし早速五十錢丈買とりためしい處最初は何んのきゝめなくあつたらとなと思しが先づあるたけはつかひいとも別に毒にはなるまじと使用居いに氣のせいか不思議にも一日一日と薄紙をへぐやう覺へ嬉しきことゝ思ひそれよりは日に何度となくつかひい處此頃は人様の御目に留り御座敷にてもお客様より「チヽお前は如何してそんなに白くなつたか」と仰せらるゝとの嬉しさこれも偏に御社の御蔭なれば姐さんたちやを茶やの女中衆に藥の効能といつしよに新聞の吹聽をいたして居ります先づは御禮まであら〳〵かしく

八月一日

浪花島の内 小ゑん

寸鐵新聞社廣告評判記ゝ者お元へ

右の如き功能なれば色白くなりたき人は早速試用して可なるべし(右八月四日の寸鐵新聞の評)

謝狀

拜啓陳者過般東京朝日新聞廣告中貴館御發賣の肉體色白新劑を拜見致し私早速五十錢の中瓶一本頂戴致し用方の通り毎日身體に施し居候處三四日以來より共効驗著しく顯はれ候間此段御禮まで奉謝上候也

八月廿四日

麹町區上六番町卅六番地 黒田友道

日新館御中

(其他各新聞の好評及び使用者よりの謝狀澤山あれども之れを略す)

(注意)市内は端書にて製造發賣元へ御注文あれば中瓶一個以上なれば直に御屆け可申候事

官許 製造發賣元 東京神田區山本町十四番地 日新館

便利實捌
京橋區銀座三丁目十五番地 森谷萬次郎
同 銀座三丁目四番地 如神堂
上方屋商店 日本橋區本石町二丁目十六番地
松澤八右衛門 牛込區市ヶ谷甲良町四十一番地

●米國醫學博士エーア氏新發明方劑

世界無比の毛生新藥

ヘアーヴイゴール

有効保證、無効損害辨償の責任ある

正價壹壜金貳圓 運送賃前と同じ

●一名毛の必ずはゑる確證藥(久しく品切れ中の所今回米國より新荷來着致候賣切れざる内速に御注文を乞ふ)

本劑は米國大醫博士エーア氏の發明新劑にして總て毛のはへべき所に毛のなき者へ必ず蒼々と毛髪を發生せしむる世界無比の特効藥なり(即ち腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髪及はゑぎわの薄き人、男女陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人等に最も迅速の奏功あり)

●本劑は日本に從來ありふれたる種々雜多の毛はゑの賣藥等とは其効勿論同日に語るべきものにあらざるなり(玉瓦混同視することと勿れ)

日本特約發賣元 東京神田區山本町十四番地 日新館

●毛はゑ藥も市内は端書にて發賣元へ御注文あれば直に御屆け可申候事

●元祖實効確證 色を白くする三能しやぼん 一個 金十錢 三個箱入 金三十錢



●抑も此三能しやほんと云へるは理化學的醫學的を應用したるものにて第一身体の色を白くし御顔等の艶を出し第二には肌のしみまたはにきびそばかすをとり、御肌合を艶美ならしむるを奇妙なり又第三種々の傳染病の毒を消すべき大効なり故に名づけて三能しやほんと云ふ常に御用ひなされ候へば色を白くすること雪をも欺むく計りにして性來色黒き肌又は何となく色悪しき肌の御方始め自然に出來たる肌のしみ腫物の跡に至る迄御用ひなさるうち知らずしらず消えて艶美なる御肌になること疑なし殊に諸傳染病の看病人などは常に之れを用ひ身体を洗ひなば其感染を防ぐこと勿論なり御試用の上眞に三能しやほんの名に背かざるを知り賜へかし

●玉掌露（ぎよくしようろ） 一名玉のはだ 一瓶金六錢 大瓶金十錢

抑（そもそ）もこの玉掌露は玉の如（ごと）く透明（あきらか）にして中（うち）に香氣（かうき）を含み皮膚（はだへ）を潤（うるほ）し艶（つや）を生ずる効能（かうのう）ある故に人々常（ひと〴〵つね）に此露（このつゆ）を手掌（てのひら）にたらし面部其外（かほそのほか）にぬりつくれば○のほせるとなし○はだあれず○日にやけるとなし○きめこまやかになり白粉（おしろい）のなじみよく○にきび○そばかす○あせも○づさう其外總（すべ）て惡（あし）きふきでものせず○しみを生（しやう）ずることなく又寒氣風（かんきかぜ）あらき時は此露（つゆ）を常（つね）より多（おほ）く用ふれば水（みづ）つかいすることも○ひゞきれず○しもやけせず四季（しき）ともに皮膚（はだ）の美艶（つや）をたもつと誠（まこと）に無類（むるゐ）の佳品（かひん）にして實に掌中（しやうちう）の寶玉（はうぎよく）と云ふべし殊（こと）に三能（さんのう）しやほんを御遣（おつかひ）の跡（あと）にて御用ひなれば尤（もつと）も効能多（かうのうおほ）し



○髮のこやし 毛のはへる香油 一名 美人かつら（ふけしらず） 一瓶金十錢ゟ

○日本第一 おしろいいらず 白妙 一瓶金十錢ゟ

發賣元 東京銀坐一丁目 つやふきん 美人かつら 本舗 佐々木玄兵衛 電話番號四百七十二

各地方特約大販賣所左に

大坂市四ツ橋 本粋丁子堂
仝淡路町 上野九郎兵衛
神戸元町 橘々藥舗
西京四條上柳馬場 田中庄兵衛
横濱尾上町四藥舗 鈴木
同辨天通四丁目 信の屋
同張町一丁目 黒見藥舗

同伊勢崎町一丁目 小池店
横須賀大瀧町 松本源次郎
同旭町廿二 中塚貞一郎
横須賀汐入町 山本賀平
同小川町通角 豐屋
越後中條町 桂や庄藏
靜岡市吳服町 伏見屋善藏

相州小田原緑町 油久本店
武州八王子 大谷店
札幌藥店 佐々木喜藏
小樽永井町 四海や東條
福島縣同市八丁目 米山店
上州高崎連雀町 桔梗や
水戸市上和泉町 福田や

長野上後町 中野商店
金澤市片町 紫雲亀田店
同香林坊上ル 清水廣田堂
仙臺市大町 高橋藤七店
秋田土手長町 新田目店
山形旅籠町 渡邊正三郎
千葉縣本町 多田や支店

信濃松本 まからすや
函舘末廣町 ●新田太平
同辨天町 國領平七

各府縣下藥賣品販賣有名藥舗又は小間物店にて取次販賣仕候最寄にて御愛求奉希上候

海軍大學校教授　理學士酒井佐保先生著

酒井 物理學教科書

洋裝脊革上製本
上下全二册、上卷
紙數五百餘頁、下
卷同上、上卷定價
金壹圓廿錢、下卷
同上、郵稅不用

上卷九月五日**發賣**●**下卷**十月下旬**發賣**●（尋常中學校同師範學校**教科用書**）

教科書として完全なる物理學書なきは方今教育界の一大憾事なりこれ酒井先生斯書のやむを得ざる所以か斯書は先生か**海軍大學校第一高等中學校**等に於て多年教授せられたる方案を基とし**幾回**か**改竄修補**し以て今日に大成せられたるものにして其學說の極めて**新奇**なる其の**實例**の**極**めて卑近なるは蓋し斯書**獨得**の長所なり加之先生か物理を說くや極めて**平易**の文字を以てし人をして學理以外に**解釋**の困難を加へしめず是亦斯書の特色と云ふべし今や新說の日に勃興する物理學にして舊來の著書を固守す可らざるは勿論器械藥品等の多く整備せざる地方學校等に於て高尙なる實驗を爲さしめん事太だ無理なる注文といはざるべからず斯書は充分此等の點に注目し**學理上實用上**務めて其無缺なるを期せられたれば世間無數の物理書中**獨步**の觀あるべし

（注意）本書出版を豫告するや**全國諸學校**より**教科書**に御採用の御申込實に夥しく又以て其の**良著**たるを知るべし

東京神田區裏神保町九番地
發兌元　**富山房書店**



神戸元町 **精々藥館發行** 通五丁目

價金大函(六十個入)四十錢○小函(二十個入)十錢

効能の理解

往昔の醫者は内服藥を以て子宮病乃ち血の道を治せんと欲し近來吾國醫藥學の開くるに隨ひ其外科術に屬するを覺り病院其他一般醫家に於ても大抵洗滌劑を用ゐるを常とす今此綿球が治病の目的は即外科的療法に屬し且つ學理上之れを是認すべきは勿論患者其人の爲め寔に必要缺くべからざる理由左の如し

第一　此綿球は子宮及膣諸病に最も適切なる藥物の溶液を充分浸染せしめたるものなれば其藥効をして容易に深部に達せしむるの手段に副ひ(乃ち藥液を注射して洗滌するの理に同じ)以て能く其病を治することを得べし

第二　此綿球は子宮及膣内の滲出物を悉く吸收し去るの作用あるを以て其腐敗して他の疾病を繼發し或は流出散亂して陰部の不潔さなるを防ぐ

第三　此綿球は通常栓塞紙の用さ爲し得べきを以て經血或は帶下の不斷流出るを防ぐ

第四　此綿球は膣内の潰瘍面(下疳或は其他の瘡より生ず)を被覆し疼痛を鎭め且つ清潔さして以て治癒を速ならしむ

第五　此綿球は滲出物の性狀を直ちに撿し得べきを以て即其病症如何を推知し之れに應ずるの注意を與ふるの便あり

發賣店　東京銀座一丁目　佐々木玄兵衛

賣捌

東京
- 兩國村松町　岩涙
- 日本橋瀬戸物町　玉置
- 日本橋本石町二　森谷
- 本郷眞砂町　尾澤

大坂
- 平野町四丁目　飯田
- 心齋橋博労町　高橋

京都
- 四條通御旅町　翠庭
- 五條通富小路　谷口

- 横濱賑町一　里見
- 名古屋本町四　土屋
- 靜岡梅屋町　森文
- 仙臺南町　後藤

賣捌所……各地到る處(藥店)にあり